太棹

竹本津太夫追悼號

第百廿六號

昭和十六年六月七日印刷納本
昭和十六年六月十日發行
（毎月一回十日發行）
昭和十六年三月廿八日第三種郵便物認可
太棹（第百廿六號）

シルウアハウス

蒲田區御園町二ノ一四

電話蒲田三六二一番

松幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園（千束二ノ三四）

牛鍋本店

電話根岸(87)〔〇三八〇番 二〇〇〇番〕

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

去日屋

新橋二ノ八

電銀二〇八

竹本津太夫最後の放送

本年一月「日向島」放送の寫眞であります。

阿部野齋場告別式直前の光景（一）

竹本津太夫の告別式は五月十日午前十時より阿部野新齋場で執行喪主竹本濱太夫夫妻の外作者食滿南北氏、豊竹古靱太夫を始め文樂座員太夫三味線人形一同、東京からは鶴澤觀西翁夫妻、實川延若、中座出勤中の河原崎長十郎、中村翫右衛門等前進座全員參列の上會葬者二千餘名の盛儀でありました。

阿部野齋場に於ける光景（二）

寫眞中央は喪主竹本濱太夫、一人をいて松竹白井社長、村上恒一（故人の令弟）氏、外親族及門弟一同、

竹本津太夫遺墨

書簡は報知講堂にて京阪素義競演會開催當時近江清華氏宛てのものであります。

色紙の薔薇は故人が餘技として樂しみしもの、筆路は既に大家の風があります。近江清華氏所藏。

太棹　第百廿六號目次

好演志渡寺……西尾福三郎…(二)
ラジオ淨曲漫評……金王丸…(二四)
白茅亭雜記……富取芳河士…(二七)
悼竹本津太夫……(二)
近江清華・額田六福・河竹繁俊・中村不折・平山蘆江・本山荻舟・小室翠雲
中村星湖・近松秋江・木谷蓬吟・高安月郊・上司小劍・伊原青々園・石井柏亭
横山大觀・田中煙亭・中村吉右衞門・花柳章太郎・伊志井寛・小泉蛙鳴
鶴澤友次郎・鶴澤觀西翁・豊竹古靱太夫・竹本大隅太夫・豊竹呂太夫
鶴澤寛治郎・吉田榮三・竹本長尾太夫・竹本津磨太夫・齋藤拳三
松本隨行記……公孫樹…(二八)
會報と消息……(三一)
太棹社彙報……(三四)
表紙・カット……宮尾しげを……
口繪——最後の放送竹本津太夫・竹本津太夫と中村鴈治郎・津太夫の松王丸・阿部野齋場告別式直前の光景一・阿部野齋場に於ける光景二・竹本津太夫遺墨

悼竹本津太夫

〔略歴〕本名村上卯之吉、明治二年十二月十四日福岡縣香春町に生る。明治十四年十三歳にして淨瑠璃に志し、七代目竹本綱太夫の門に入り竹本濱子太夫と名乘る。明治廿三年竹本文太夫となり同四十三年師匠の前名三代目津太夫を襲名、昭和四年文樂座紋下となる。五月七日午後一時四十分死去。享年七十三。

○ 近江清華

津太夫師とは二十五六年來の交誼である。年に一二回づゝ素淨瑠璃で新富座へ來たものだが、當時越路太夫、前南部太夫、津太夫、土佐太夫、前源太夫などの顔ぶれであつた。此時分から見れば晩年の津太夫師はうまくなつた。相三味線は友次郎師であつたが、何んと言つても淨瑠璃は修業である。

十年程前に身延へ行つた時である、住吉で遊んで、今度は濱寺へ案内をするといふので、綱造師と共々出かけた、款待の意味で鉢卷をしてステヽコか何かを踊つてとても喜んだが方々の座敷で「津太夫さんが踊つてゐる」と騒ぎをしてこれも大喜び、こゝらに津太夫らしい處がある。

思ひ出は澤山あつて筆紙に盡くせぬが、感心な事は二十幾年交際の間少しも變らぬ事であつた。

○ 額田六福

私は世話物より時代物、ことに王朝時代のものがすきなので、自然さうした語りものゝ得意な津太夫は大好きな一人で可なりよく聞いてゐる方ですが、一番耳に殘つてゐるのは紋下襲名當時の妹背山の山の段でした。勿論大判事でこの壯麗無比な舞臺は今でも判然と思ひ出せます。壽命だから仕方がありませんが、今後あれ丈けの人がいつ出て來るかと思ふと淋しくなります。つばめあたりの大成を唯一の樂みとしてゐます。

○ 河竹繁俊

津太夫師の死、年齢からいへばあきらめもつけられるものの、やはり惜しい。津、土佐、古靱、駒と擧げて來て、やはり津が何だか一番どつしりしてゐた。效能を並べずとも、立ちまさつてゐた感じである。お得意のものも少くはなかつたであらうが、日向島を不思議に何度か聽いて、またいつもよかつたのをおぼえてゐる。さうして榮三の景淸が、またすばらしかつたのもおぼえてゐる。

それにつけてもかうなつて見ると、昨年計劃された文樂の記錄映画の出來なかつたのが殘念千萬である。ほのかに聞いた所によると、七段目を、津太夫の由良之助、土佐太夫のお輕、古靱の平右衞門——勿論榮三の由良之助に文五郎のお輕——といふ、文樂オールスター・キャストで純粹の記錄映画を作らうといふものだつたらしい。

古典藝術の保存記錄は、機會を失つたら再び望まれないものである。津太夫師の逝去に胸を打たれると共に、私共としては、この記錄保存の急務を痛感したのであつた。

○ 中村不折

凡そ藝道と名のつくものは修養錬磨の度を重ぬるに隨て其向上を見るのである、古語に曰く「才を恃まずして力を盡せ」とは此間の苦心をさしたものである。

藝道もいろ〳〵あるけれど、義太夫節の如きも其一で、最も六づケ敷ものとされてゐる。義太夫でも芝居でも昔の師匠は實に嚴格であつて、弟子を取扱ふに苟くもしない、その話を今時の人間は聞いて馬鹿な事をしたものだと笑ふものさへある。津太夫、古靱太夫、人形では文五郎氏などの藝を見聞すると、若い時からの苦心修養が忍ばれて實に貴いものと感ずるのである。殊に津太夫の義太夫を聞く時には、一句一言は實に我藝界に遊ぶものゝ發憤をそゝられるのである。其見地から義太夫の面白さに感ずると共に自からを憤起させる爲めに、余は文樂の引越興行には多忙の身も何とか算段をして聞きに行く事にした。然かるに先頃は突如として津太夫丈逝去の報に接し驚愕措く處を知らず、實に同丈の逝去は藝界全體の損失であり又哀惜であるとの感を深ふして止まぬのである。願はくば今の義太夫界の人々は津太夫丈早年の修錬を思ふて、いよ〳〵奮勵して斯道の爲に盡されん事をお勸めするものである。

津太夫五章

平山蘆江

津太夫といふ人の思ひ出をならべて見ます。

一、少しも上手ぶらず巧者でないところがすきでした。
一、たのもしい義太夫なつかしみの深い義太夫。
一、日向島をも一度素上るりでしんみりききたい。
一、紋下にならないでゐればもつと立派な太夫になれたでせうのにとも思ふ。
一、啖のからんだやうなあの聲が津太夫の一生に大層仕あはせを齎らしたのではないかしら。

○ 本山荻舟

淨瑠璃の規模を假りに、「大きい」と「花やか」と「澁い」との三樣に大別すると、攝津大掾系は「花やか」、大隅太夫系は「大きい」、津太夫系は「澁い」方に屬するであらう。先代津太夫は藝の神といはれたほどの名人だつたが、持前の難聲であつた爲、澁くなるのは當然だつた。聲量が豊富でなく、そして花やかさに乏しかつたから、文樂を背負つて立つべき紋下となるのは不向きだつた。だからこの澁い方の面が際立て珍重され、一部の間には攝津大掾以上と推奬された。先代大隅の藝は堂々たる大きさを有つてゐたけれど、一旦文樂を去つた人だつたから、紋下問題には緣が遠く、大掾の歿後門弟の越路が踏襲したのは當然だつた。越路も文字太夫時代には、師匠寫しの美聲だつたが、紋下となる時分には研究して錆を加へたから、或る意味では師匠優りともいはれたが、貫祿といふか藝格といふか、何となく器の小さい感じは免れなかつた。

越路の歿後、先輩の土佐太夫を超えて、津太夫が紋下となるに就いては、兎角の評もあつたけれど、先大隅系であつて見れば、土佐に實現性の少なかつたのは是非がないし、問題は津太夫の藝格にあつたと見なければならぬ。先代の妙技を以てしても、紋下の器とはいはれなかつたのに、當時の津太夫いかに巧者とはいへ、重荷過ぎるとの杞憂であつたにちがひない。私たち文太夫時代から聽いて、その藝風には先代以來引續き好感を寄せてゐる者にも、なほ且危惧を免れなかつたが、しかしいよ〳〵その地位に据つて見ると、以前から澁い方の面で圓熟してゐた語り口に、紋下としての貫祿が加はつた爲か、不思議に藝の大きさが見えて、兎角の評は聞きながら、やはり立派な紋下としての使命を果し得たと思ひ、今更追惜に堪へぬものがある。先代は紋下にならなかつた爲に、名人の名を完うし、故人は紋下になつた爲に、一部に望蜀の念を抱かせたとはいへ、やはり或る意味に於いて、師匠優りであつたといふを妨げぬと思ふ。

世界的藝術「文樂」と巨頭津太夫の死

小室翠雲

世界的の文樂座

『文樂』の人形芝居は、啻に大阪の名物たるのみならず實に日本の名物として、今や世界的に稱讃を博してをる。昨年であつたか、野上豊一郎君が、獨、伊盟邦の招聘を受けて、特に持つて行つた。義太夫――太棹が分らなくては興味が半減されるが、唯その人形だけでなら非常な喝采を博して來たと共に、全く世界的藝術として非常な驚異を與へた。

然るにその文樂座は、最近實に不幸續きで昨秋は錣太夫逝き、今春は盲人駒太夫を失ひ、更にそれと前後して土佐太夫が急逝した。そこへ今回の津太夫の死、實に哀悼痛惜の至りに堪へぬ。何と云つても津太夫、古靱太夫、榮三、文五郎の四巨頭を擁した豪華陣は、實に文樂座の誇であつた。その第一頭目の津太夫を失つたことは、云ひ知れぬ寂寥、哀愁である。況んや、吾輩には津太夫の思ひ出の坐に多きに於てをや。

義太夫の思ひ出

吾輩が初めて上京した頃は已に五十餘年前であるが、當時は娘義太夫の全盛時代で、綾之助の全然期で斷然、光つてゐた茅場町藥師の寄席は、義太夫の常席でそれは繁盛したものである。田舍から來た親爺に伴れられてそこへ行つたことがある。黒い髭に銀の平打の簪が光る、肩絹着けて金卷繪の高見臺に乘り出す姿は、一種の派手やかさで、謂ゆるドウする連を唸らせ、誠に青年を魅惑したものである。吾輩は初めて聽く義太夫、それに十五や十六では、藝も何も分つたものでないが、それでも派手で、澁味が一向ないことを頗る物足らなく思つた。それから五六年も經つてからか、豊竹呂昇が大阪から來て帝都の人氣を一身に集めた。確に寄席藝人とは一枚上で、澁味があり深刻味のあることを覺えた。その一座の東廣などは大きかつたね、これが女か？と驚いた。それ以來、少しは義太夫に興味を持つたが、畫道研究に一心の時代で、なか〳〵それを聽きに行く時間の餘裕を得なかつた。

その後、何年經つてからか大阪へ行つた。大阪へ行つては名物文樂座を覗かざるを得ない、多年の翹望！實に嬉しかつた、その時に津太夫を聽いた、恐らくはこの頃が全盛期だつたのだらう。義太夫の分らぬ吾輩でも、その澁味、その深刻味、而してその强い絲――太棹は、聽いてゐて全く恍惚とした。況んや、その人形、人間以上の――人間の及ばざる妙味あるに於てをや。

津太夫の逸話

津太夫に恍惚とした一夜、こんな挿話を聽いた。

津太夫がまだ修行中の頃、いくら精出しても一向上達せぬ。師匠――越路太夫か――が汗水垂らして世話してくれるが駄目だ、ドウか物にしたいと親切に世話してくれがいかぬ。流石の師匠も愛想をつかし「お前のやうな下手では何と

も仕様がない、モウ斷然、明らめて止めるが宜い」と、嚴しく勘當した。

そう云はれて見ると、津太夫も何だか情なくなつて、獨りでにパラ〳〵と熱い涙が出る、「御師匠さん！　そう云はずに御世話を下さい、私も一生懸命やりますから……」と賴んだが「駄目々々とても文樂にはなれぬのだ」と、テンで相手にしてくれぬ。津太夫は悔しくて〳〵、「好きこそ物の上手と云ふ、好きなこの義太夫が出來ぬとは」と、一夜泣き明したが、あまりの悔やしさに、小指を嚙み切つた。鮮血淋漓と滴る手を突いて「御師匠様！どうぞ」と云つた時には、流石の師匠も驚いた。

これぞ藝界の斷臂だ。禪宗の始祖達磨大師が、支那の少林山の山奥に坐禪してをられる時、弟子の慧可大師が初めて入門して「ドウか安心させて下さい」と云つたが、達磨大師は容易に許さない。コンコンと積る雪の中に一夜を明したが、達磨大師はまだ許されぬ、慧可は堪へずして、遂に一刀を拔いて左の臂を切つて「我が眞心はこの通りです」と差出した時、流石の達磨大師も感心して遂に弟子にされたと云ふは有名な話である。

不思議や、これから津太夫の藝はメリメリと上達して、遂に文樂座の巨頭となるに至つた。

人形芝居の起原

文樂座の人形芝居は、極めて象徴的なもので、人間の出來ない型がある、そこに一種云ふべからざる妙味がある。上方の役者は、文樂座へ行つて、人形に教へられて來ると云ふ、これは非常に面白い話だと思ふ。この人形芝居の起原は、昔阿波の德島に源之丞と云ふ人形使ひが居つた。大きな人形を箱に入れて持つて歩き、城下の辻々に子供を集めては芝居をやる、これを「デコ廻し」と云ふ、丁度、今日の紙芝居のやうなものである。それが勸善懲惡で、忠孝節義を說いて頗る教化的のものであつた。それが後に大阪に出て文樂座の人形芝居となつたと云ふ。故に德島は今でも義太夫が非常に盛んである。

人形芝居は、元より人間ほど自由でないが、而も人間で出來ない妙味があつて、人形振と云ふ特種の力があり、古雅な何とも云へぬ味ひがある。これが唯一無二の藝術として喝采される所以で、外人などは非常に之を愛し、之を鑑賞する、外人には此の生命が分るのだ、實に偉いと思ふ。そこへ行くと南畫と頗る共通の點がある。南畫の根本は寫實、寫生だが寫生に捉はれないで寫意で行く。人形芝居は全くそれである義太夫の聲調、その澁味、その深刻味、それ等も南畫と似て居るではないかと云ふやうなことを、初めて津太夫に依つて考へさせられた。

この人を失つたことは啻に文樂座の損失のみでなく、實に日本藝術界の大損害である。後に殘つた文樂座の諸君が、こ

の世界的藝術鼓吹のために、一層の努力されんことを希望して止まぬ、これが津太夫追善の意義であらう。

津太夫を悼む歌

中村星湖

われは知らぬ津太夫なれど糸の音にいのち寄せつゝ生きし
あはれさ
たふとくもまた悲しくも思はるゝ津太夫なれや糸の音に生
きし

○　近松秋江

津太夫が黄泉に旅立つたことは寂しい心地がする。私はこゝに更めて言ふ迄もなく義太夫音樂くらゐ好きなものはない。私が若い時から好んで聽いた名人は今や津太夫の死によつて悉くを失つた。是等義太夫語りにせよ又梨園の名人にせよ、私と同時代に生存した人々が相次いで死んで行くことは、やがて自分もその時代から去つて行くことを意味してゐる。

つい少し前ラヂオで津太夫の何であつたか聽いた。それが聽きじまひであつた。今更言ふ迄もなく津太夫の語り物では〝沼津〟が一番好かつた。私はラヂオで、もつと義太夫を聽き度いと思ふけれどラヂオは今日の若い時代の人々の好尚に迎合する爲か毎日毎夜洋樂でなければ夜も日も明けないと言つた有樣である。これは致し方もないことかも知れぬが、誠に殘念千萬である。私は輕音樂とか室内樂とか交響樂などとかの區別さへ知らない。こう言ふと若い人から笑はれるであらうが笑はれてもかまはない。

俳句や和歌が私の傳統的旨好に叶つてゐると同じ意味に於て義太夫即ち淨瑠璃音樂を以つて我が邦の國民音樂と確心してゐる。今日これ程日本趣味が唱へられてゐながら、西洋崇拜のガチャ〳〵したまるでブリキの空鑵を叩くやうな騷々しい音をはやし立てられると、私は毎時腦貧血を起しそうになるので急いでスウキツチを切る。津太夫の事を言はうとしてつい他の事を言つてしまつた。然しこれだけ言へば、これに依つて津太夫の死を追悼する意味にもならうと思ふ。五月二十六日。

津太夫を惜しむ

木谷蓬吟

○舊體制藝人型の代表者として最後の人。
○大まかな、無頓着な、のんびりした、其人間味と、正比例した藝の持主。
○惜しいのは獨得の輕妙味と、サビのかゝつた女性美と、

世話の老け役の描現など。

○ 高安月郊

私が大阪に居る頃、よく文樂へ行て其頃の名人たちを聞いた中に、先代津太夫は澁味があつて、時に聲がきれる間も餘情があつた。

跡をついだ津太夫はそれより音量があつたが、やはり澁味を受次ぎ落着いて品が好く、一番印象をとめたのは矢張「沼津」である。千本松原は一番苦心した所で、床本が汗で黄色くなつて居たとの事。近松の「宵庚申」を復活したのを大阪で聞いたが、それも手柄として好い。土佐太夫が歿して間もなく此人まで逝つたのは其道に取つても惜しい事、今後さびしさが思ひやられる。

○ 上司小劍

なんと言つても近代の巨匠でせうが、どうも消極的と言つた感じを受けましたね。三味線音樂に一向趣味をもたぬ私も、義太夫だけは、音樂道を離れて、相當好きです。しかしほんとうにはわかりません。またわかりたくもありません。晩年の津太夫は、いつも「沼津」で、また「沼津」かといふ氣もしました。あの無理にこじつけた、封建思想としても、非人情的な、荒んだ場面を、私は好みませんでした。津太夫の「日向島」といへば、柄にないやうに言はれたものでせうが、私は一度彼れの「日向島」を聽いて、相當面白いと思つたことがありました。それよりも、津太夫に就いて一ばん感銘の遺つてゐるのは、藝道以外、先年秋のころ、大阪四つ橋の文樂前へ、いまの長谷川某(?)當年の林長二郎が、立派な自動車で堂々表へ乘り付けたあとから、津太夫がバスを下りて、トボトボと樂屋入りした光景です。

○ 伊原青々園

拜復折角の來命ながら津太夫といふ人には何等の交際もなく隨つて思出話も無之候右不悪御諒察ありたく候近來貴社に御無沙汰致し居り候そのうち何か認め差上可申候

○ 石井柏亭

毎度「太棹」を御送付難有存じます。義太夫きらひではないのですが、中々鑑賞する機會がないので此頃遠ふざかつて居ます。それで御訊ねの津太夫に就ても御返事する資格がありません。悪しからず。

○　横山大觀

拜啓初夏の候益々御清祥奉賀上候扨て御手紙の趣に候處當方事先頃より微恙の爲引こもり居し爲め甚だ折角の御事ながら御答差上申難く候次第何卒此儀不悪御諒承被下度御願申上候右御返事迄

津太夫の事ども

田中煙亭

昨年の事であつた。アノ大阪で批評家といふ人達に、かなり虐めつけられ、津太夫是非の問題が八釜しかつたそれとは關係なしに、東京の三越の某重役の意見もあり、一つ津太夫を聘び、同好の士だけの集まりで一夕しんみりとその藝術を味はひたいものだといふ議が、僕にも話があつた。それから僕は又た別に、素義の有力者に津太夫をお座敷で、ゆつくり一段聽く會を催ほしたら、といふ議を提出して、賛意だけは得たが、そのいづれもが、事實とならずにしまつたのであつた。もうその津太夫は此の世に居なくなつたのである。

藝術に批評は附き物であり、又その向上、研鑽に必要なものではあるが、その批評なるものが、急所に當らなかつたら何にもならず、的を外れたら、その本人は徒らに苦笑して、唯だ所謂腐つてしまう外はないものである。津太夫に對する生前、殊にその晩年の批評が、的中してゐたかゐないか、我等は知らず、その津太夫は、もう此の世には居ないのである。彼の死の直前まで、毒づいてゐた人など、聊か寢覺の悪い事であらうともおもふ。

腹の強い事無類、實に堂々たる義太夫を語つたのは津太夫である。それでゐて、その得意は、むしろ世話物であつた事もおもしろく、又、絃などはどうでもよいといつた風に、お前は聽手に彈け、おれは聽手に語る、といつた風でもあつてどうかすると、驚かされる事もあつた津太夫である。アノ力量で强引に語る淨瑠璃の中に、アノ難聲を驅使して、又恐ろしく艶つぽい所を聽かせた津太夫でもあつた。沼津のお米などがそれで、日向島の佐次太夫の巧さなどが、世話物語りの本色を發揮するのであつた。一見ヌーボーの如く、棒讀みの如く聽こえる彼れの淨瑠璃に、云ひ知れぬ苦心の技巧の痕を認める、といふ評はどうであらう。恰かも故人になつた三代目柳家小さんが、一見とつ〳〵として、そゝつかしい話し振、りの中に、憺たる技巧が織り込まれてゐた事は知る人ぞ知るそれと同じである。

合三味線に綱造氏を起用した時の「沼津」の、小あげの彈出し、三下りでゆくべきを、綱造氏が二上りで彈いてゐた。これを聽いた或る人が、津太夫があれを默つて彈かしてゐるのが判らない、と云つてゐたのは、早や數年前の事であるが、津

太夫といふ人は、三味線などは實際どうでも可かつたのだらう。晩年合三味線をしきりに取り代へてゐたのには、内部にどんなイキサツがあつたのか、それは僕等にはわらない。

最近戰場から歸還した津の子太夫が濱太夫と改名して文樂に名乘り出たのを聽くや聽かずに病歿した津太夫には同情せずにはゐられない。又、紋下の一子として、これから大いに勉强もし、向上もしやうといふ濱太夫其の人には更に同情する譯だが、聞く所によると、中々の利根者で、今後文樂をピカ一で背負つて立つべき古靱太夫氏に氣に入られてゐるといふ話だから、古靱氏は充分この憐れむべき遺兒を傳育薫陶する事であらうと思はれる。

ともあれ、津太夫は此の世にゐなくなつた。もうあれだけの人も輩出しないであらうとおもふと、心細いかぎり、ア、文樂はどこへ行く、と云ひたい。越路、南部全盛時代から、好きで聞ぎ洩すまいとしてゐた津太夫だが、僕はまだ一回も面接した事もなく、彼れも亦た僕の名をすら知らなかつた譯であるが、徵せられて匆惶これだけの事を筆にした。以上

津太夫師のこと

中村吉右衞門

故人津太夫師の師匠、名人竹本津太夫（法善寺の地内に住はれて居たので俗に法善寺の師匠とも云ふ）と父歌六とは藝のことは勿論至つて大仲よしであつた。

先日逝れた津太夫師と私は、師が文太夫と云はれた頃からの永い間のお馴染であつた。文樂の紋下まで出世せられた近世の名人、まだ〳〵私は澤山聽きたいことがあつたのに急逝されたのはなんとも殘念なことである。斯界の爲めにも實にこの上もない惜いことである。

私が昨年の十一月、歌舞伎座で菊畑の智惠内を演るので、師の泊られてゐる有明館を訪ねた、丁度その折は明治座の文樂を打上げられて、歸阪の支度にせわしい時ではあつたが、師は心よく會つてくれていろ〳〵話をされた「私の若い時、法善寺の師匠の宅へ先代の片岡仁左衞門（我當時代）さんが、やはり智惠内を訊きに來て、なんべんも〳〵稽古をしてゐたのを覺えて居りますよ……どうです今度おやりになるなら、いつものつて云ふ智惠内の科白『……虎の卷を奪ひとつて奉らんな、この儀は如何に』を、三味線にのらず演られては如何ですか」と云はれたので、私も即座になる程結構であると思つたので、そこをいく度も聞いてその通り演じてみた。お蔭でそのところが好評であつたので厚く禮狀を出した。すると折返し師匠からも返事で、是非菊畑を見せて貰ひたいが、生憎文樂座開演中で見に行くことが出來ない殘念であると書いてよこした、が、これが私に對しては師の最後の思ひ出となつてしまつた。（昭和十六年六月三日　東京劇場樂屋にて）

○　花柳章太郎

貴社益々御隆盛奉賀候故津太夫氏追悼の寄稿御依頼に有之候得共目下小生六月有樂座興行の稽古中の爲め非常に多忙にて本月中には間に合ひ兼ね候間悪からず御了承被下度願上候

恩師竹本津太夫のこと

伊志井　寛

昨年の暮も押つまつた二十　日のことである。正月上演と決まつた「浪花女」について、いろ〳〵お話を伺ひたいから津太夫師に皆で會いたい、幸ひ君は弟子なのだから是が非でもお連れして來てくれないかと言ふのである。

あまり急なのでどうかとも思つたが歸京の日も迫つてゐるので、とりあへず家の者に手紙を持たせてやると「他の人でないから……」と二つ返事で引受けてくれた、場所は南の吉兆といふ家で、一座からは花柳、柳、大矢の諸兄と私の四人が出かけた。約束の時間に師匠は息子さんの多津二君（今の濱太夫當時は津の子太夫）を連れてニコ〳〵と入つて來られた他にこれも急に御願ひした文五郎さんも出席してくれたので、その日は誠に好い會合になつた、それぞれ挨拶をする一座の諸兄に「何時も伊志井さんが御世話になつて……」と私のために一々御禮を言つてくれてゐる師匠の姿を私は何だか久しく離れてゐた父親から友達に禮を言つてもらつてゐるやうな、少しテレたやうな氣持でながめてゐた、「寛の奴はほんとうに好い師匠をもつて幸せだよ」と花柳さんが怒つたやうな語調で言つた、私は何だか急にその時眼頭が熱くなつてきた。

その日は話がトン〳〵とハズンで人前ではあまりシャベル事の好きでない津太夫師が、次から次と可成、調子にのつて話てくれた、聞く方も一生懸命、師と文五郎さんが代る代る話す名人上手の逸話やその時々の生きた姿を、何一つ聞きもらすまいと乘り出してゐた、一ト渡り話のすむ迄、いくらすゝめても師匠は料理に手をつけやうとはしなかつた。冷たくなつた料理を前に話はそれからそれと進み團平師やお千賀さんを通り越し、淨るりそのもの、三味線、人形、はては藝全體の話にまで及んでゐた。樂屋入り前の少しの時間ではあつたが皆相當な參考を得た、しかし話はつきない、今に東京へ見えた時には一夕ゆつくりとお話を聞きたいものだと皆も言ひ出し、師も「こんな話やつたら、何時でもします」と至極御氣嫌で再會を約しお別れしたのであるが、それが此の世でのお別れになつてしまつたのである。その時、扮裝の參考にもならうし、今日の會合の記念にと自から筆をとつてタトウの裏に署名した此君帖（古今義太夫人の寫眞帖）を頂戴して歸つたのであるが、今は忘れ得ぬ形見の一つとなつてしまつた。

御靈文樂座にゐた四年間は私の一生に數々の思ひ出と幾多の教訓、そして今日舞臺に立つ私の藝の大きな基礎を與へてくれた。すでに二十四年の歳月が流れてゐる、當時師は五十才の元氣の盛り私は十八才の少年であつた、樂屋の一番奥の部屋に越路太夫、吉兵衛、次の三疊程の部屋に、津太夫師、南部太夫(先代)、古靱太夫、清六(先代)、友次郎、寛治郎(先代)の六師がゐたのである。その又次の二疊程の部屋に、源太夫、駒太夫、菅太夫、その前のこれも三疊位の部屋に、浪花絃阿彌になられた廣助師、これも近く逝かれた土佐太夫(その頃の伊達太夫)、彌太夫、叶太夫、吉彌、吉三郎(今の吉兵衛)叶の諸師がゐられたのであるが、以上列記したその中で今尚健在でゐられる人と言へば僅かに三四人を數へるに過ぎない、なんと言ふ淋しさであらう。そしてその諸師の中どの御一人を考へてみてもそれぞれ立派な藝格の持主であり當代得難き方々である事を思ふ時、あの頃の文樂といふものは如何に多士濟々であつたことか。

伊賀越が通し狂言で出た時のことである。岡崎は越路太夫沼津は津太夫師であつた、いふまでもなく津太夫といへば、沼津と誰でもが考へる程の得意の語り物である沼津であるが、その何百ペン何千ペンか語つた沼津を、樂屋入りすると毎日必ず本を出しては友治郎師と向き合つて小音ながら、ところどころ合せてゐられた姿を私は今に忘れない。あの用意あの熱心があればこそ……としみじみ教へられたことであつた。同じ芝居を二十五日間やる私等の現在、それが全くの新作であつても初日二日と初めの間は本と首つ引き、演出家や作者と相談もしいろ〳〵研究、工夫もするが、セリフも入り大體出來上つて五日目、十日目ともなると、やゝ安心もし出る前に臺本を手にもしなくなる自分に氣の付く時、師の立派に出來上つた上にも尚一層みがきをかけるあの限ない勉强心を思ひ出して一人恐縮するのである。恩師の思ひ出は文樂時代はもとより、病を得て歸京後も、映画時代、新劇時代、新派へ入つてからといろ〳〵あるが、今は時間もなく、又なにかの折に書せて頂くとして、今は唯、心より

師の御冥福をお祈りして、筆をおきます。

(六、四 有樂座樂屋にて)

文樂の危機

小泉蛙鳴

私は絶對に離れまいと決心してゐた東京を遇然起つた就職問題が豫想以上に速く纏つた爲に四月卅日から急に宇都宮に勤めることになつたので家庭の引越は後廻しに單身赴任し、而も新任早々仕事が多忙だつたので新聞を讀む暇も、ラヂオを聽く機會も無かつたので富取氏から津太夫の追憶談を求める手紙を貰ふ迄全然知らなかつた。新任地の人々が文樂に少しでも興味があれば噂話にでも出たであらうにと殘念がつて

も後の祭、早速古い都新聞を取寄せて津太夫の死の確報を得たが悲しみは津太夫の死去のみならずして津太夫亡き後、文樂の紋下として全責任を負つて活躍して貰はねばならぬ豊竹古靱太夫が愛し子憲祐君を失つたといふ所謂「古靱の悲劇」に迄接し、唯、茫然とし暫くは涙も出なかつた。

頬を傳ふ涙の内に私が學生時代、エルサレムの聖地を巡禮する如き眞劍な氣地で文樂詣うでに西下した折りに、撮影した津太夫夫妻の家庭姿、憲祐君を三輪車に乘せてその後押しをしてゐる慈父古靱太夫の溫容等が次々に映画のフラツシユバツクのように浮出し、追憶は更に新しい涙を誘出して止め度がなかつた。

私と文樂の人々との交渉の最初は古靱太夫の藝評に肇まり、樂屋入りをしたのはその後で津太夫の語つた盲景清の人形撮影がキツカケとなり、その寫眞が取持つ緣となつて吉田榮三と酒盃を交はして藝談に夜更しをするようになつたのである。

文樂研究の第一歩として人形の型の寫眞千枚撮影を企圖しその餘錄として太夫三味線彈き人形遣ひの殆んど全部の寫眞を撮影をした事があつたが、十數年を經た今日では私の最も好きな三絃の名手友次郎病み、吉兵衞退き、邪道に踏み込んでゐたが常に新しい道を開かうとしてゐた善人錣太夫、俳人であり乍らその前身が政治家の家に寄食して居た爲めに可惜天賦の才能を有し乍らその政治的手腕の爲めに晩年一點の濁りを殘したが品と味の人たる土佐太夫、その土佐太夫引退後唯一人の世話物語りとして惜しまれた盲人駒太夫、金壹圓也の注射料を惜しんでポツクリ逝つた足遣ひの名人吉田冠四老人、同じく足遣ひで認められ乍ら若死した吉田市松、座頭吉田榮三の左手及び足を遣つて前途を愉しみにして居た吉田扇太郎と吉田榮之助、日支事變の華と散つた吉田玉丸等々枚擧に暇無き程鬼籍に入り追憶の涙でアルバムを濡らすのみである。

然し私の歎きは紋下竹本津太夫を始め以上列記した文樂の名手逸材を失つたことよりも文樂の質的低下にある。

新文樂開場後興行的に成功した後、文樂の人々で何が好況の原因であるか及びその好況が何時迄續くか、若し不況の波が訪れたら如何に身を處すべきかを考へた人が何人あるだらうか？

特に人形遣ひの若手で次の時代を背負ねばならぬ人達で宇頂天になつて邪道に踏み込んだ人が多いように感じられる。

私は徒らに文樂國營論に讃成する者では無い。國營論者の大部分は理想論者で足が地に附いてゐない憾みがある。

松竹の傘下に在つて結構であると思ふが今の儘では滅亡はしないが私達の見向きもしたくないような下劣なものになる危險性が充分に感受される。

その最も顯著な例は師匠に對する禮儀の減退である。從つて型を尊ぶ藝術が型を亂し、前受けのみを鋭つた愚劣な藝に

墜落しつゝあることは衆知の認める處と思ふ。

これを救ふ方法は太夫三絃人形の三部の主腦者の權威ある團結と演出者の養成である。

私の尊敬する古靱太夫と榮三が餘りにも神經質なる爲めに自ら閉籠つてゐた殼を破つて今こそ文樂救濟の爲に鬼一となるべき時機である。

紋下問題と時勢の推移を察するに敏なるが爲めに腐り切つて居た古靱太夫は恐らく面倒な紋下なぞにはなりたくないと思ふが、歴史ある文樂を守る爲めに病弱の身を鞭打つてこの難局を切拔ける可く努力して貰ひたい。餘りにも重い責任が病弱の體を一層衰弱させるといふ考へを捨てゝ、その責任感が病氣を征服することを祈つて止まない。その重責を全うさす爲めに古靱太夫の愛好者達は出來る丈け自分一人で古靱太夫を專有する事を謹しみ公人としての古靱太夫の發展に努力すべきである。

次に演出者の問題に移るが、之れはどうしても文樂關係者一同で養成すべきである。

外から適任者が入座しても「こんな若僧に何が判るか」「彼奴は偉らそうな事を云つても皆俺達が教へてやつたんぢやあないか」等といふけちな考へを捨てゝ、新しい時代に則し正しい進路を示す指導者に古い傳統、習慣、技術の總べてを惜しみ無くさらけ出してそれを取捨選擇して完全なる文樂の發展を計るべきである。

歸還した津の子太夫が濱太夫を襲名した喜びの舞臺にも同座し得ずして逝つた津太夫の心の裡は察するに餘りあるものがある。

亦愛兒の死を秘して「太十」を勤める古靱太夫の悲劇にも胸打たれる。

然し總ての悲歎を克服して斷乎たる指導部を確立し、立派な演出者を養成し、吾等の文樂座を永久に崇高なる聖地として全世界の信者を參集せしめる日の一日も近からん事を祈る妄言多謝。（十六、五、廿二）

○　鶴澤友次郎

津太夫氏とは明治十九年松島文樂座より轉々昭和の今日四つ橋文樂座と五十八年間同じ舞臺に勤めた竹馬の友であります。昔時彼氏は文太夫と稱し十九歳、私は（小庄にて）十四歳能く相三味線を勤めました。其頃は名人の太夫三絃も多數居られましたが、其中で年少の津太夫氏は故越路太夫（當時常子太夫）と相並び重き役に用ひられました。同氏は至極溫厚の人で、先代津太夫氏とは藝風なり平常の人格がよく似て居りました。私とは能く氣が合ひまして、親族同樣の交りを致して居りました。

彼氏は隨分惡聲の質でしたが、それでも晩年は太功記尼ケ崎、一谷陣屋等東流の淨瑠璃をよく語りこなされました。晩

年私が京地で病臥中數度訪ねて來られまして、種々親切に慰めた上、全快の節は印象深い文樂座の舞臺で引退しようと堅い契ひをしましたが、一時重體を傳へられた私が康を得て、當時元氣そのものゝやうな同氏が約束も果さず先に逝れた事は如何にも殘念で、淋しさと同時に感慨無量に堪えない次第で御座います。

○ 鶴澤觀西翁

私が最初交際をしたのは津太夫氏が十八歳の時でありました。

濱子太夫から文太夫になつたのは明治廿三年で、文太夫といふ名前は、文樂座の座主植村氏に愛され、この植村氏の先代が文樂といふ俳名で淨瑠璃を語つてゐられたといふので文樂の文の字に因んだもので、覽の「九十九新左衞門屋敷の段」の中を改名の披露として語られましたが、先代の津太夫師(法善寺の師匠)も大變に喜ばれました。此時に私は谷太夫師(後の染太夫)を彈いて切を勤めてゐました。

津太夫を襲名されてからの事は皆様も御承知の事で、私は略しますが、氏は生駒聖天の大信心家で、平素武運長久を祈り、そして親としての義務を三つ立派に全ふして永眠されたのであります。

一、息子の多津二君(濱太夫)を國の爲めに立派な軍人として出征をさせた事。

二、歸還をした多津二君には結婚式も擧げさせた事。

三、先代濱太夫師に師事をしたので、今度息子に濱太夫の跡を繼がせた事。

多津二君も歸還をして婚禮もさせて貰ひ濱太夫も襲名をして、これから親孝行をするといふ時に親は亡く誠に氣の毒ではありますが、津太夫氏は此の三つを立派に果たして喜んで冥目された事でありませう。

○ 豊竹古靱太夫

故津太夫氏と小生とは兄弟弟子の間柄にて、尤も津太夫氏は先代津太夫師(俗に法善寺)の直系ではなく先代津太夫師の兄弟子たる濱太夫師の門人で、其師匠歿後先代津太夫師へ入門されました、年配と申し小生の兄貴分として其逝去は愚息を失ひしより以上に淋しさを感じます。

五月七日は我々に取り厄日と申升か奇緣と云ひますか、愚息寅太郎が死去と相前後して卽ち津太夫氏の死去が午后一時四十分、愚息が午後三時に亡くなりました事も又何かの因緣と存じます。併し故津太夫氏は一生を通じて誠に幸運に惠まれた人と存じます、息子の津の子太夫君は昨秋立派に御國に御奉公を果たしての歸還勇士で、又四月には由緒ある濱太夫名跡を襲名致し、其配役は妹背山三段目山之段の掛合大判事

を故津太夫氏、久我之助を濱太夫、又定高を小生、雛鳥を南部太夫の役割にて華々しく出演致す事になつてをり、故人も愛兒の改名興行に喜んで出勤すべく稽古中不幸病魔に冒され其興行中出勤出來ず遂に死去されましたが、此愛兒濱太夫の披露興行に出演出來なかつた事は實に遺憾な事でありました、日々病床で焦慮されて居た事は親心として尤もな事で、これだけは心殘りであつた事と推察してお氣の毒に存じて居ります。

津太夫氏の死直前午後一時頃に小生見舞に參り、病床に於て私が故人の手を握り『私が解りますか』と申升と、ボンヤリ小生の顏を見て居てやがて何か云ひたいやうに口をモグ〳〵して居られましたが、とう〳〵口はきけませんでした、之れが最期のお別れでした、其節私は之れは吃度息子濱太夫君の事を宜敷賴むといふ意味だと解しましたが、其後一時間にして遂に永眠致されました。

最近不幸にも相次いで冥府へ旅立ち一入寂寞を感じ居る時今又津太夫氏の死は實に淋しく、藝道の兄貴先輩の死を悼む心頻りであります。向後は一座の人々と睦じく結束して各自にも益々自重して頂き、又反省もし斯道に精進する事が亡津太夫氏の追善ともなり、尙又我鄕土藝術の保護と一層各位の御支援と御愛顧に依り斯道の愈々隆盛發展を祈り此稿を終ります。

○ 竹本大隅太夫

津太夫氏とは永い間の交際で、一口に申ますと努力の人、紋下になつて一段と光りを添えたと思ひます。

去る四月興行、息子の改名披露で氏は大判事で妹背山の掛合を勤める段取りになつてゐました處、病魔に侵され出演不可能となりましたのは心殘りの事と察するに餘りある次第で文樂としても又斯界としても誠に惜しい事で御座います。

私は白井社長の依賴をうけまして此の大判事の代役を勤めましたが、ほんの二三日の事と思つて、見舞に行つては興奮でもされて却て惡い結果を引起してはと思ひましたので遠慮をしてとう〳〵逢はずにしまひました事は殘念に堪えません。

去年の五月頃であつたか、鮨屋の代り役をして禮に貰つた煙草入も今はかたみとなりました。

逸話。大正十四年十二月鹿兒島に行く車中、食堂で氏はカレーライスを誂へた、やがて「ライスカレー、お待ち遠ふ樣」とボーイが持つて來たので「ライスカレーではない、カレーライスを注文したのだ」とボーイとの押し問答に私達一同大笑ひをしましたが、それでも未だ氏はカレーライスを誂へたのだと大眞面目で、カレーライスとライスカレーとは同じものですといふボーイの言葉に「違ふ」と大變立腹された事がありますが、今でも其話で時々大笑ひを致します。

○ 鶴澤寛治郎

津太夫様の思ひ出話を書けとの事、若輩の私何事も存じませんが、只津太夫様は「節に囚はれず情を語れと」先代津太夫師が言はれたと常々申して居られました故、衣鉢を受繼がれし様に思ひます。又舞臺の意氣は大變にやかましく言はれ、明日の日を知らず一生懸命に勤められました。なほ人物の情を彈く事を特に注意せられ、此様な語り口の人故一例を擧げますれば、日向島の「父も引寄せなでさすり」の處は三味線を彈いてゐて涙がこぼれました。又一の谷三段目の義經の詞に「堅固で居たなア滿足や……」の條りは義經の意中がよく現はれ、津太夫様の藝には凡て情がありました。

私も兩三年修業させて貰ひばどうにかなると樂しみ居りましたが、實に惜しい事を致しました。

○ 吉田榮三

拜復　綠風さわやかな候となりました。御社愈々御隆盛の段欣賀の至りに存上ます。扨て御誌六月號は津太夫師追悼號を御發行下さいます趣き、私等斯界の者と致しましても洵に有りがたき事と感謝致し居ります。就ては御申越しにより早速故津太夫師の思出話を投稿致したいのですが文樂座六月興行に新作「小鍛冶」を上演致しますので過日來其れの振付の稽古におはれ居りまして只今纏つた事は書けません。

もう少し日數の豫猶でもありましたら又何とか御期待に副へぬまでも少し位のお話もさせて頂けましたでせうが、右様の始末で誠に申譯け御座ねませんがあしからず御諒承下さいまして此度の處は御容赦下さいませ。

右御返事まで申上げます。

○ 竹本長尾太夫

師匠の亡くなられた事は誠に殘念に堪えません。平常御壯健の方にて此様に早く逝去されるとは思つてゐませんでした。前日まで「大分快くなつた必ず癒る」と私共に申された位で九州から師匠の弟さんがお見舞に見えて「人生は何時とは知れぬ故言へ置く事でもあるなら言へ置く方がいゝ」と言はれました處「お前の方が常々弱いぢやないか、お前は子供もなくそれに大分ものもある様だからお前こそ私に言へ殘して置け」と申され、死といふ事は微塵も思つて居らず全快するものと堅く信じて居られた様であります。

師匠は大神經質でしたので、胃開溶といふ事にして胃癌といふ事は絶對に秘しておきました。二月頃から服痛の氣分があり、三月末には大分惡くなられましたが、四月興行の御子息津の子太夫氏の改名披露に是非出演したいと醫師の留るのを少し無理をされたのが病を急に重くしたのではないかと思

ひます。

昨年は出征中には母堂様に亡くなられ、引續いて今回御尊父様に死別されました御子息は實にお氣の毒であります。

お家さんはお身體が弱いので、津の子太夫さんの事を大變安じられ、歸還される迄は生きてゐる、又歸還したら早速嫁を貰ひたいとそればかり申され、又師匠よりは先きに死なねばならぬとこれも常々申して居られました。そして戰死者の靈を祭り毎朝先祖と戰死者の爲めに讀經を缺かされた事なく辭世も讀まれ又遺言も佛壇の中に納めてありました。師匠も又お家さんを大切にして出かける時には何時も同伴をされました。そのお家さんの常々のお言葉の通り私共門弟は師匠に進めて歸還された御子息に鶴澤寛治郎氏の長女を貰つていたゞきました。何かと中々揃つてゐる方で師匠も大變に喜んで居られ、濱太夫氏もお嫁さんも定まり、又改名も師匠存命中に芽出度修了されましたのはお氣の毒の中にもせめてもの幸ひと存じます。

師匠は染太夫師が亡くなられ、七五三太夫氏が急死で一足飛びに三段目語りとなり、次いで三代目越路太夫師と三代目南部師が攝津大掾師の七回忌に越路太夫師は攝津大掾師の前名春太夫を、南部太夫師は四代目越路太夫に改名し、高野山の掛合にて改名披露をする事になつてゐました處、南部太夫師が急死、又越路太夫師も病氣全快に至らず永眠されました爲め茲で師匠は紋下に進級されましたが、紋下繼續も永く、四つ橋文樂座の新築も出來上つて鶴澤友次郎師と兩紋下揃えで出演して居られました。御負最にも名士の方が澤山あり、又府廳から表彰されましたのも成駒家さんと昔から二人だけであり、又政府から御下賜金が下つたのも初めてゞあります。

師匠の門人文太夫君はとても大酒呑で、兎角酒の爲めに師匠をしくじつたものであります。永らく休演してゐましたが、四五年前師匠にも歸參が叶ひ文樂座にも再出演をしてゐますが、文太夫君が歸參の叶つた日に「わしはお前が歸參の叶つた日から生駒聖天王へ酒を絶つ故、お前も今日限り酒を絶つて一滴たりとも飲む事はならん」と、其日限り酒を絶たれたといふ位人一倍の弟子思ひでありました。若い時分から生駒聖天王を信心して毎月一日十五日にはお參りをされました。そして、先祖や世話になつた方々の弔ひも缺かさず忘れずに命日には必ずお參りをされました。正しい一方で人の言ふ事を眞に受けて兎角だまされたりして、我々の樣なものにでも物事を尋ねたり相談をしたりされました、藝の外には何ものもない人でありました。

○　竹本津磨太夫

土佐の賢しこ過ぎ、古靱の學者過ぎ、津の馬鹿過ぎと雜誌や新聞紙上でよく見受ける處、全く其通りかも知れません。

師匠は世間にうとく藝以外には趣味とてもなく亦見得もなく一見凡人の如き人でありました。然し凡人放れの天性があつて、あれ迄大成なさしめた事と思ひます。又人に負ける事が嫌ひで、物事にも動ぜぬ事も普通人で出來ない處がありました。どんな復雜な問題中でも一度寢に就けばケロリと忘れ一分も經たぬ間に白川夜舟、なんとなく雄大な處がありました。そして或る一面亦誠に律義で人を感動させる事も少なくなく、一例として、若き頃より神佛の信仰が特に深く、生駒の聖天樣へは數十年の間怠りなく月參りをせられました。私が何時もお供をして行きましたが、昔は大阪から徒歩でお參りをしたもの（電車でも一時間はかゝる）名人團平師などは文樂が終つてから徒歩でお參りをして、寒中水垢離をして神前で三味線を引いて修業せられたものだと、昔の名人の苦勞話しをよく聞かされました。亦或る門人で大酒の爲め再三失敗をした太夫を一日聖天樣へ伴ひ、神前で酒を絶つ事を誓ひ門人だけでは可愛さうだとあつて、御自身も同樣酒と煙草迄を絶ち、最近まで一滴の酒も口にせず、煙草も止めて居られました。全く藝以外に天性的凡人ならぬ所があり、亡くなられて見ると今更感慨無量に堪えません。

聲なりとレコード聞けば平作の
念佛とともに消ゆる淋しさ

紋下の死

齋藤拳三

文樂にとつては何と云ふ厄年であらう。只さへ寂しい駒太夫、土佐太夫の死後、最早、再起不能の噂があつたとは云へ餘りにも早く到來した津太夫の死であつた。歸還した愛息の濱太夫襲名の晴れの舞臺も見ない悲しい死であつた。

彼が義太夫人として惠まれない少い天分にもかかわらず長命と律義な勤續とが、かち得た、紋下の榮位も永きが故に少々不幸であつた形さへ私には見へた。

津太夫の藝のよさは五十年一日の如く何等獨創を加へざる古風な甘さにあつた。

其の逆櫓、堀川、紙茶、鰻谷、彌作等の得意の語り物を聽いて居ると、いかにも泰平の餘澤が生んだ樂しい淨瑠璃であつた。永生きしてくれたればこそ聽けた一時代前の淨瑠璃であつた。

彼は口調の重い語り口が時代物語りの如く誤られたが、其の本領は彼の生地の流露する平作や彌左衞門や佐治太夫にあつた、太夫卽人間論になるが書置を讀む堀川の傳兵衞が手紙の好きな土佐太夫に及ばず、谷三の彌陀六が物堅い品位のある古靱太夫の樣に宗淸に變れないのは何としても彼が英雄偉人の表現出來ない好々爺だつたからであらう。

彼の紋下の重責も適當な支配人を配してやらなかつた事が不幸だつた。

明日の人形淨瑠璃が若い時代層へ呼かける用意と理解とを必要とする以上、植村最負卽文樂座最負を古淨瑠璃の懷しい形だけで死守する役割以外を負擔させるには、彼は餘りに弱々しい權門に媚びる古い型の藝人だつたのである。

彼より十年も若い古靱太夫が越路死後の紋下をめざして故三代淸六を稽古臺に死物狂ひに食い下つていつた。太十、寺子屋、合邦の如き「紋下のもの」を不得意な津太夫に餘りにも執拗に繰り返させた興行者の無理解も、故人の長所をかくして短所を露出する結果となつて古淨瑠璃に理解を持たぬ小供天狗の筆禍をあたへさせる一因となつたのも氣の毒であつた。

彼が氣儘に語り捨てた數人の相三味線から放送された不評も自ら招いた結果とは云へ私は可衰想な氣がしてならぬ。

彼は可成多數の弟子や最負を持つて居たが其れが亦眞の最負や命と魂のこもつた弟子達でなかつた事は、彼の人德がなかつた爲めでもあらうか。

彼の死がもう第一線を隱退して居る土佐太夫の死程にも私を驚かさなかつたのも、私が彼の語り物を一通り聽きつくしたのが一因であつたのであらう。

事實津太夫の甘さは深いが狹い甘さであつた、どの特意の語り物を見ても音學的要素の少いものであつた「橋本」の甚兵衞の樣な平民的人物の出て來る部分に限られた妙味であつた不得意な時代物の中ではやはり紋下披露に出した「谷三」がよかつた、熊谷がいかにも田舍武士らしかつた。

彼が頑固に一段を一つの調子でスラ〳〵と織り出そうとする語り口は私の最も好ましい特長であつた、がこれは此の種の名人藝を知らぬ若い學生上りの自稱淨瑠璃通には理解が出來なかつたのも無理のない事である。然もこれ亦亡び行く日本音樂や話術藝の共通の特色で筆者なども故寶井馬琴、錦城齋典山の如き講釋の名手から此の種の手法を敎へられなければ知らずに通つてしまつた境地であつたであらう。

筆者は只の一度此の人と明治座の樂屋で會つた事がある、親玉の玉造が玉三の金藤次の頭を法善寺の時はゴマ鹽にし、攝津大掾の時は黑にするなぞの話をしてくれた。

筆者は文樂の人形に就いては非常に遺憾な點が多々あるから紋下に對して一度ゆつくりお耳に入れたいと云ふと、すぐ承知してくれた。最後に明日は吉右衞門の求めに應じて基盤太平記を語つて聽かすので、相三味線の重造と引合せをするからとの話で其の院本の拔き刷りを一部差上げるとて親切に一部頂戴した。すると側に居た播路太夫が何か耳打ちをすると其れは後日郵送するから返還してくれとの話で再び取り上げてしまつた、筆者は以前から津太夫の小供ッぽい性格を聞いて居たので、初會でしかも最後の對面にすぐ其の片鱗にふれる事が出來て微笑を禁じ得なかつた次第である。

彼を失つた文樂座に當然生ずるであらふ處の紋下問題と古靱太夫の健康の重大性に關しては他日大いに書かせて頂く事とする。

謹んで村上卯之吉氏の冥福を祈る。

好演志渡寺

——文樂五月興行——

西尾福三郎

津太夫の急逝によつて文樂の頽勢はいよいよ覆ふべくもない現狀となつてきた。鍛、駒、土佐、津と太夫許りが引續いて鬼籍に入つた事は一種の運命みたやうなものを感じさせる。これが假りに人形遣ひの方にこれだけの損失があつたとしたら、恐らく文樂藝術は崩壞してしまつてゐたかも知れない。そう思ふと危期に曝されてゐる人形陣の明日は何うなるか、思つてみたゞけでも暗澹たる氣持にならざるを得ない。

應急措置として六月興行より角太夫と叶太夫が參加する事となり、同時に三味線の綱造も復歸する事となつた。太夫や三味線は何と云つてもまだ代りがあるから、たとへ當座の間に合せでも補充の方法があるが、忽ち困るのは人形遣ひの方である。それかあらぬかこの頃榮三文五郎を自重させ、紋十郎以下の若手を重用しやうとする傾向が見えてきてゐるやうに感ぜられる。

正月以來引き續く大當りで、二月は兩巨頭の休演で日殘りに終つた外、大てい二十四五日打ち續けてゐる現狀である。これを一二年前の十七八日が漸つとであつた時分の寥々たる景氣に較べると眞に隔世の感がある。だが毎興行五六本建てで半年間打ち續けたら忽ち演し物の種がきれてしまふ怖れがある。そこで毎回必ず新作を一本と云ふ事になつてくる。この新作たるや頗る間に合せのもので、さなきだに新作と云へば味の薄いものに陷り易い所から、特にこの頃の新作ときたら餘りにも代用品じみてゐて情無い位である。せめて十に一つ位確つかりとした新作品が出てもよい頃なのに、かつての修禪寺物語以來これと云ふ印象に殘る新作のないのは何うも物足りない。噂にきけば宮本武藏の新作案が出てゐるさうだが、とにかくこの邊りで文樂も新しいコースを見出さねばならぬ時機に際會してゐるのではないか。

ところで今月は先々月の陸軍記念日の戰陣訓に倣つて海軍記念日の爲に海國日本魂と云ふ十二景の新作を出してゐる。和唐内、山田長政、阪本と中岡、廣瀨中佐と杉野と云つたやうな取合せの前後に奏樂だけのつなぎを添へたもので、輕い

見世物といふより外に正面きつて取上げる程のものでもない。

今月の問題は何と云つても織太夫の志渡寺である。中のお辻の最初の出を和泉が語る。この人の語り口は地味で野暮つたいが、その代り田舎淨瑠璃のやうな所謂股引義太の味が出てゐて面白い。叶の絃もよい。次の源太左衞門の條りは大隅であるが、これもこの人の粗剛な味がうまく恰つてゐる。後のお辻の意見場から水垢離以下を織太夫が受持つてゐるが、この場は單なる技巧だけで押しきれるものではなく、多分の修練と、そしてその上に肉體的な强靱性がなければ倒底完全に表現しきれるものではない。一方それに恰はしい烈しい三味線の撥さばきを要求される箇所がある。かつての津太夫綱造による逞しき演出をみた記憶があるが、幸ひにして織太夫の肚とそも〳〵團六の絃もこの人としては今迄に見ない程の意力的な彈奏で立派な志渡寺を表現してゐた。古靱の地位が紋下代りになつてくると、今後の中堅は何と云つても織太夫あたりにきめられる。それに今迄は少さい乍ら中堅派の一枚看板であつた駒太夫も居たが、それも亡き今日となつてくると、これ迄のやうに劇場音曲のスケに出るやうな道草は止めて、專心文樂の次の時代の地堅めに努力して貰はねばならない人である。榮三のお辻もこの人の老女物としては數少ないものだけに特に珍重である。坊太郎の紋之助は異數の拔擢である。この幕ぎれに坊太郎が「乳母いのう〳〵」と云つてお辻の落入りを悲しむ臺詞を床ではなく誰か別の人が（人形遣ひか）云つてゐるが、あれはお芝居染みておていやだ。殊に人形劇の演出に太夫以外の人が臺詞を云ふのはアンサンブルを破つて面白くない。先代萩の榮御前の入り觸れや、妹背山の定高や大判事の入り觸れにも同樣の演出をやるが、本文にある限りは太夫が語るのだから別に不合理はないが、それ以外は要するに無用の入れ言であつて、それ程迄にしてお芝居化させる必要はない筈である。

古靱の太功記、これは餘りにも有名な太十であるが、私はこの人のものとしては必ずしも第一級のものではないやうに思ふ。昔は知らず、今は太十の古靱でもなからう。前を文字と新左衞門できいたが、新左衞門と清六の絃の縛がりに私としては却つて耳を惹かれるものがあつたやうに思ふ。人形も榮三の光秀文五郎の操は定評があるとして文作の重次郎光之助の初菊となるといつもの顏ぶれとは大部味が違つてきてゐる事も私の興味を散漫させた原因かも知れない。例の近頃しきりに問題になつてゐる「逆賊非道の名……」の條りは二箇所とも「逆賊非道の名を汚す」と語つてゐた。名を汚すが本當か、名に汚すが本當かこれを詳述してゐる餘悠はないが、とにかくきいたまゝを爲念附記しておく事にする。總體に古靱のものとしては折角乍ら太十は私にとつてはさ程感銘の深いものではなかつた。これは或は私の期待が餘りに多過ぎた結果の反動なのかも知れない。

次きに千兩幟のかけ合ひがあつて、これは故駒太夫の預かり弟子駒若太夫が司太夫になつた披露狂言である。おとわを呂太夫、鐵ヶ嶽を相生が承つてゐるが、作が低調なのと曲が面白くないのとで遺憾乍ら印象が淡い。結極仙糸の絃を娛しむだけのものとなつてしまつた。

切りに珍らしく矢口渡しが出てゐるが時間の都合で大部端折られてゐる。登場人物と云ひ舞臺面の色彩と云ひ、これは相當面白い作品なのだが何うした譯か割合に上演回數が尠ない。尤も今度のやうな取扱ひ方では折角の面白さを減殺してしまつてゐるが……。初めの時は南部が丸ごかしに語つてゐた。頓兵衞と六造の異色ある性格が語り得て始めてお船が活きてくるのだが、伊達になるとこの點が甚だ不充分で物足りない。

以上の外序に鬼一法眼の五條橋がある。

辨慶は濱太夫一本に牛若を源太夫と文太夫の分擔で、兩床を設けた演出である。

以上の外志渡寺の後を相生太夫が織太夫と一日交代で分擔するのだが、この人の分は筆者の都合できく折がなかつた。

猶六月興行より別途掲出の如く太夫三味線の組合せが多少變更される事になつたが、これは或意味で新味を齎らせる事になるから組合せよろしきを得れば案外な好結果を見せるかも知れないと多少の期待を抱いてゐる。

▽　▽　▽

誠實勤勉の人

豐竹呂太夫

竹本津太夫師は終始一貫文樂座に於て、其藝を磨き其藝を輝かした人で、沙彌から一段々々と練上げて長老になつたといふ修業ぶりで、まことに堅實な藝で、燃ゆるが如き熱の籠つた藝でありました。聽き込んで行くに隨つて其蘊蓄の深さと、其修練の尊さが味はるゝ、近來得難い藝界の長者でありました。

私は師が最後の日の午前に訪問しました。此時は誰にも面會謝絶といふ事になつて居ましたが、私は構はず其病床に參りますと、師は目を開いて、言葉も途切れ〳〵に舞臺の事を語られるのでありました、私は長座の御病體に障るのを恐れて、そこ〳〵に暇を告げ、午後文樂座に參りまして師の訃を聞き、あまりの無常迅速に仰天したやうな次第であります。斯の如くにして師が文樂座に現役紋下のまゝ、死の直前まで身も心も斯道に捧げた事は、まことに感銘の深いものがあります。私は親に別れたやうな悲みで、今は何を申上ぐる言葉もありませんが、そのうち師の一代に就て、私の知る所を語つて見たいと思うて居ます。

伊達子改め　土佐廣さんへ

煙亭

伊達な春着を新體制の廣い世界へ衣替へ

ラジオ　淨曲漫評

金王丸

大阪女義　〔五月二日〕

楠昔噺　‖碪拍子の段

彈語り　竹本小仙

『むかし〳〵…』と呼びかけるやうに語り出した。例によつて彈語りである。德太夫の內は、津太夫によつて放送され、この碪拍子――どんぶりこで有名な――は、たしか先年錣太夫がマイクにかけたやうな氣がするもの、中々、達者な藝の人でなければ、おもしろく聽かされぬものである。さて我れ等の小仙さんは、『柴よりは腰打つ音が』のあたりもよく、爺と媼との、仲のよい二人の笑ひを、克明に、頗る念入りに、それが相當鮮やかに出來たのは豪い、道行く人の戰さ物語りの『雁のわたるやうに』が、少し突飛な大聲を出したほか、二度目の落武者の戰ばなしの三枚目も大層おもしろく、雀と橘の老夫婦のいさかひも、眞劍の中に情が籠つて結構だつた。地色の音調に、例の古靱さんがちよい〳〵出てほゝゑませ『腹立ちまぎれ、日の暮れまぎれ、むしやくしや腹の……』まで、可なり愉しませて呉れた。

東京女義　〔五月六日〕

增補生寫朝顏話　‖宿屋の段

竹本佳照
絃　鶴澤清一
琴　豐澤松四郎

珍らしくも無いが、アナウンサーが、生寫(しやうつし)朝顏話、とやつたのは先づ噴き出させられた。よく、佳照(かてるさん)清一(きよいちさん)などと言はなかつた事とおもふ。テン〳〵〳〵と彈き出した撥音は冴えてゐた。丁寧にオクリをつけて「何國にも暫しは旅と綴りけん」と語り出した佳照さん、しばらくは調子の安定が取れなかつたやうだつたが、やがて立直つて、德右衞門の朝顏の不仕合せを物語る工合も克明で、心に犇々とたゆる駒澤も大に苦心らしい。岩代は相當張つて居たやうだが、どうやら思ふ壺に嵌らず、無殘なるかな秋月の……と朝顏の出からはコツチのものとばかり、馬力もかゝり、焦るゝ夫のあるぞとも、から、涙に曇る爪調べ、など大によろしい。『露の干ぬ間』の琴唄の聲なり調子なりが、次の身の上ばなしの、さはりと同じ聲なり調子であつたやうなのは、少し考慮を願ひたく、多少なりともカン高く、めくら聲にまでならずとも、女の琴唄らしく聽かせる必要があるとおもふ。さはりでは、「偶々逢ひば逢ひながら」や「美濃尾張さへ定めなく」あたり、女義式ながら大に受ける、『短かい契り』を『逢瀨』と改めてゐたが同じ事だらう。最初の語り出しの『つれ〳〵詫ぶる假の宿』を『詫びる』と語つたが、これは『ぶ』が可からうとおもふ。『聲をしのびて歎

きける』でをはり。清一さんの絃、無論結構だが、チトかけ聲がうるさく耳について困つた、殊に琴唄の間、アー、アーアーと同じやうに、間斷なくやつてゐたが、アヽいふものでせうか、と疑はしかつた。松四郎氏の琴、樂なもので御苦勞樣ッ。

文樂中繼〔五月十日〕

關取千兩幟

＝猪名川内の段

おとわ　豊竹呂太夫
猪名川　駒若太夫改メ豊竹司太夫
鐵ヶ嶽　竹本織太夫
大阪屋　竹本播路太夫
呼遣ひ　豊竹千駒太夫
絃　豊澤仙糸
胡弓　野澤龍市

文樂座五月興行の中繼放送である。降つて湧くやうな淨曲殿堂の異變凶事は、遂にこの放送の日、我等の耳に傳はつた紋下津太夫の他界であつた。一座の愁傷はもとより、聽者の多數淨曲ファンも、感慨無量のものがあり、中堅若手の發奮勉勵を望むの外はない。されば、先月は津の子の濱太夫、今月は駒若の司太夫、改名を披露して大に後進の拔てきといふ事になる。此の千兩幟も、司太夫の爲めに企畫された一段らしく、御覽の通りの配役である。先づ文樂獨特の口上觸れがあつて『芝居は南、米市は北、相撲と能の常臺』とお約束の置上るり、彈出しの仙糸師の撥のおもしろさ、直ぐ『町中の最負に肩も猪名川が……』と力士二人の出になるが、悲しい事には織さんの鐵ヶ嶽の堂々と立派を極めるに對し、猪名川關の影の薄いは此の一段の悲劇の爲めか、呂太夫氏のおとわも結構角力取の世話女房にはなつてゐたが、肝心のくどきの中も、仙糸の絃の妙技に喰はれて、今一ト息パツとせぬものゝあつたは、我等の僻が耳であるかも知れぬ。後の司太夫の猪名川が『もしもゆかねば絶對絶命、これが暇乞ひにならうも知れぬ』……云々のじツと持たせる言ひ廻しの、悲痛の感じの薄かつた事を遺憾とする。お師匠番？仙糸師の鞭達を望んでやまぬ。

東京女義〔五月十五日〕

壺坂靈驗記

＝澤市内より壺坂寺の段＝

彈語り　竹本素女

東都女義界の御ン大である。斷乎彈語りを固守しての出演、愚作であり名曲であるといふ壺坂を提げて……とにもかくにも聽かねばならぬ我等の職域奉公であつたにも拘はらず、どうにも都合の悪い外出時にぶつかつて、出先きで聽くべき便宜もなく、時計をにらめて遂にその儘……誠に申譯もない次第、決して惡からう筈のない此の人、此の語り物！

東京床語〔五月廿二日〕

繪本太功記

＝尼ヶ崎の段

竹本鏡太夫
絃　鶴澤市作

歌舞伎座のチョボ床へ上つて、遙かに西文樂の巨星異變を考ふる時、感慨一しほであらう處の鏡太夫君、暫らく振りに太十を放送した。堂々たるものである。そして、先づ十次郎が大層好い。さこそ

なげかんふびんやと、など大に可く、二世も三世も、は平凡のやうだつたが『なさけない』はかなりに味を聽かせた。初菊も存外(失禮)可愛らしく、どう急かるゝものぞいな、など中々結構だつた。體軀の生理的に聲帶の工合からか、彼の織太夫に聽く如く、古靱太夫その儘の音づかひにほゝゑませる『門出をいはふのしこんぶ』や『察しやつたる十次郎』や『前後不覺に泣き叫ぶ』など、古うツフアンその儘であつた。夕顏棚の光秀の出、素晴らしく大きいのに對して市作君の撥が、割合に……叩きの利かぬ嫌ひがあり、その代り『ぬき足さし足』のあたりは、よくその風景をゑがき出してゐた。大體に於て鏡太夫氏、所謂足が長いといふものか『唯だ茫、チョン然たる』で三十五分のお時間一ぱいになつてしまつた。

文樂若手　〔五月廿五日〕

玉藻前曦袂

―道春館の段

竹本源太夫
絃野澤吉彌

三段目は源太夫御家の藝である。先代のそれなど未だに耳に殘つてその早世が惜まれてならぬ、とにかく先代源太夫歿後、文樂に三段目語りが無くなつたとまで言はれるその後繼者である。さて當夜の玉三、多少の期待を以てスキツチを入れたのだが……初めの紙半枚、先づ金襖の上使受けといふ舞臺を現はさねばならぬ大事の處、あまりに朗讀、素讀のノベツタラで、金藤次の呼びなども、確ツかりしてくれと言ひたいほど、聊かガツカリさせられる。かくと知らせに……と御臺の出、この萩の方は、調子もよし、品位も備はつて頗る結構、此の工合なら、と膝を進めて聽き入ると、金藤次がどうも振はぬ。遠慮をするのか、これが本格か、我等は、今一ト息突込んで、語り進んで貰ひたいのであつた。金藤次ばかりでない、桂姫も同樣である『死手の晴着とおとゞひが……』など失禮ながらお素人以下の稚拙であり『そら、おそろしい身の冥加』などの間(ま)なども困りものとおもつた。所謂キカセドコロの中で『聲くもらせば初花姫』あたりがちよつと出來たとおもはせたゞけ、大奥殿に、うちかけ姿の二人の姫の壽語祿、といふ場面を考へたゞけでも、今少し美くしく、今少し色氣―艶―を持たせて語れぬものかとつい毒口を叩きたくなるのであつた。

菊池幽芳氏より

拜啓旅行不在中にて昨日歸宅御手紙拜見時機を失し申譯無之候尤も小生は近年耳甚だ遠くなり細かき節廻しなどさつぱり聞えず、從つてこの數年文樂を聞きし事もなく、義太夫界とも劇界とも全く遠ざかり居り候次第自然また興味も薄れ候て近年の津太夫を知らず、新進の若手など全く相知り申さゞる有樣に有之、よし在宅中御手紙に接し候とも現實に卽したる所感申上る事不可能に有之候まゝ右御詫旁々御返事まで。

白茅亭雜記

富取芳河士

大竹貫一翁

五月十四日川崎へ炙をするに行き夕方東京驛から池袋行のバスで歸らうと東京驛へ降りると、驛の出口でばつたり大竹貫一翁に出會つた。翁の令兄諒作氏は祖父芳齋に就て南画を學び、芳齋亡き後長崎の湘半に師事して湘江と號し、湘半そつくりの画をかゝれた。

此日大竹翁は「本多大使が歸るので……」と、大使を迎へに出られたのだ。翁も永い間神經痛になやまされたが、酒豪の翁は酒を藥として飲み〳〵なほしてしまはれた。これに倣つて僕もその手をやりたいが酒飢饉の當節ではそれも出來ず、その爲めか今年の神經痛は強くて其上永引くこと、良いといふ療治はみんなして見たが、その中にニンニクが利くといふ事を某婦人雜誌に見たので、ニンニクをおろしてうどん粉に交ぜて腰へ貼りつけた處、大ヤケドをして、カチ〳〵山のやうだと苦笑したことである。

悲壯古靱太夫の太十

豊竹古靱太夫の息子寅太郎君は、竹本津太夫と相前後して五月七日十八歳を末期に不歸の客となつた。古靱太夫は喪を秘して文樂座五月興行に出勤してゐたが、役場の太功記十段目で「十八年がその間」の處では人知れぬ斷腸の思ひで語つたと聞く、悲愁の極に達した古靱太夫の「太十」は眞に迫つたものがあつたであらう。

馬樂の落語

はなし家は笑はせるやうに顏が出來てゐてつまらない事でも笑はせる、落語は顏を見て居ないとどうもおかしくないが、馬樂はさうした連中と違ふ處がある。

「商人は毎度有難うといふが葬儀屋は毎度有難うとは申しません言つたら變なもので、毎度有難う、これで三回目ですが今度はいつです」と言つたやうな事でラヂオで顏を見なくとも充分に笑はされる。

私の友人に葬儀屋がゐるが、年賀狀には「本年も不相變御引立を乞ふ」と言つて來る。

護國寺

國寶の護國寺、此の護國寺の月光殿にも前號に記した白書院といふ感じのする奥座敷はあるが、數年前に當時の住職が俗人でもあつたか境内に寶物藏のやうな一見塔のやうなものを建てゝ四方の風物を壞はしてしまつた。石階も新らしくし、山門も朱塗りの新築(幾百年後には時代も付くであらうが)爲めに高橋箒庵の仲麿堂、圓覺寺の門、凡てが風致を害されてゐる。第一入口に交番とは無風流な話、人待顏の易者や、手拭を頭にのせて鳩の餌を賣る婆さんの方がどんなに應しいか知れない。

文豪漱石の「斷り狀」

護國寺の奥は豊島ケ丘に隣りて擴大な墓地で有名な墓碑が澤山ある。この墓地を通り拔けて豊島區日出町を横切るとこれ又擴大な雜司ケ谷墓地である。此の雜司ケ谷墓地で笹鳴を追つてゐると、ふと文豪故夏目漱石の墓碑が目に入つた。尾崎紅葉の墓碑は青山にあつたやうに思はれるが、漱石の墓碑はこゝにあつたのかと暫くは碑を仰ぎ、そして默禱をして又ふと氏の斷り狀が手許にある事を思ひ出した。斷り狀といふのは僕がなりはひのいとま「初鴈」といふ俳誌を出してゐた明治卅九年頃の事で、顧問を依賴した時のその斷り狀である。斷り狀も今は面白いものである。

松◇本◇隨◇行◇記

公孫樹

東都五十義會會長細川清氏は芽出度春季大會を終了したので、例年の如く同會の幹部連を招待して今回は信州松本へ遠征同市の出征遺家族慰安として松本座に於て二日間義太夫大會を催ほした。僕も招かれて一行に加はる事になり、新宿驛へ駈けつけたのは七日午前七時半である。

驛には細川會長を始め、文久、壽瓢、市菊、其柳、鳴門、呑笑、桔梗の諸氏の外和田長男氏（道之助師妻女嚴父）笠原書記、それに三味線の猿之助、道之助、龜造、宗之助師等が集つて、松四郎、猿幸、團蝶さんなどが見送りに見えてゐた。開札間際に都昇氏とがん昇氏が駈けつけ操氏は次の汽車で、長八さんも後から見えて一行は二十名である。

僕は右側の端つこの窓際に陣取つたが直ぐ筋向ふの左側には英靈の席と貼紙がしてあつて、間もなく英靈を首にかけたその兄さんか弟さんが席に着いた。

陸軍兵長故吉川秀雄之靈

皆が默禮をした、乘込んで來る人達も各々默禮を捧げて席に着く。僕の隣りの岩崎がん昇さんが「僕の子供も斯うなつて歸還をしたのだ」とそゞろ思ひに耽けて合掌した。

がん昇氏には四男あつて、うち三人迄出征をせられ、四人目の喜雄君が去年北支で戰死をして今年の二月遺骨となつて凱旋をしたのださうで、長男は少尉、二男は軍曹である。

八王子を過ぎると間もなく小佛や笹子の隧道を越えて汽車は甲府へ着いた。

「英靈をお持ちの方はありませんか」と驛員が窓から覗き込む、そこには金の蓮華を一と向ひ置いたテーブルの上に燒香をする用意がされてある。英靈は首にかけられたまゝ窓口へ、ふと見ると燒香をしてゐる人に交つて、阪東勝治一座の太夫元魁家廣丸さんの顏が見えた、僕はやをら窓から頭を出して「いやア」と聲をかけると先方も驚いて窓に寄つて來た。甲府を打つて目下富士の下吉田に興行中でこれから船津、小田原、平塚、幡野とまはるのださうだ、相變らず太夫元は元氣がいゝ。

やがて甲府を發車するとこゝらは葡萄畑ばかりで風景は平凡、車中の向ふ端には鳴門氏や猿之助師匠連中が陣取つて賑つてゐる。中央には口では負けない桔梗、清、道之助氏等の萬丈の氣焰ならぬ頓智語呂で壽瓢、都昇なんどの人々が中てられてゐるのも之又大賑ひ。僕の向ひの文久氏は氏使用の高座着の袴についての由緒を頻りに僕に說いてゐる。と、筋向ふの椅子に市菊大人我不關と言つた風に獨り悅に入つてゐる。

それも道理、お隣りには眼鏡をかけた

束髪の一寸面長がの餘り悪くもない中年間が梨の皮を剝いてそつと大人に渡してゐる、大人も又「おすしは如何」と折詰めを婦人の膝の上にのつけて「晩に松本座へゐらつしやい」「參りますわ」とか何んとかと睦しさう言はん方なく、羨やましいぞッ。

「富取さん、こつちへ出てゐらつしやいな」と清氏に聲をかけられて中央の空いた椅子へ席をかへたら「富取さん、諏訪湖から鎌倉へ拔けられる道があるのを知つてますか」と道之助師が眞面目に問ふ、「ほゝう、それは知りませんネ」と言ふと「スワカマクラと言ふでせう」ともう早速一本やつて來る。あの山も今に穴を掘つてトンネルやうにするとか、豚が寢てゐたのでトンネルと言ふのだとか、桔梗氏が「牛が寢てゐたらどうなる」と言ふと「モウウシマイ」だなど、奇問奇答が續いて「あッ、赤が出てゐるのに汽車を止めぬ」と清氏が農家の赤い干し物を指して大笑ひ。

武田信謙の城趾、諏訪湖、鹽尻と廿四孝にゆかりある道中を忍んで二時松本着それより電車にて淺間溫泉「井筒の湯」に投宿、井筒は木下松玉氏經營の旅館である。

一行は三人五人と部屋を分かち、先づ一と風呂浴びて落着いた處へ、團體で善光寺參詣の神馬里芳さんが戸倉溫泉へ行く途中、團體と別れて應援に來たとて長野から二時間も汽車に乘つて駈けつける。その熱心を感謝して賑かに話し合てゐるうちに樂屋入りの時間となつた。

松本座の前には東都五十義會幹部連と書き出された前飾りや會旗も景氣よく、數本の幟ははた〳〵と初夏の風に音立てゝゐる。

舞臺には簾を下げた置高座、兩脇には細川會長と幹部一同へ井筒から贈られた二臺の花輪の配置もよく、もう聽衆は押しかけてゐる。

座の廊下には故人となつた中車、鴈治郎、左團次を始め、菊五郎、吉右衞門、幸四郎などの名優連や文樂座の興行をした時の番附が大きな額になづてかゝげてあり、定員千四百名、平土間、兩桟敷、二階三階と誠に落着きの良い劇場である。

東桟敷には松本の素義で柳糸、象昇の兩氏に太棹藝妓の東米さんなどが陣取つてそこへ語り終つた人々が追々とやつて來て審査、いや熱心に聽いてゐる。清氏は大切掛合の膝栗毛の臺本を前にして暗誦に一生懸命である。

前號に記載した番組と異動があるので左に再錄。

（初日）太十（松玉、宗之助）十種香（其柳、道之助）合邦（鳴門、猿之助）儀作前（呑笑、道之助）寺子屋（がん昇、長八）沼津（市菊、宗之助）油屋（壽瓢、龜造）太十（都昇、龜造）揚屋（操、道之助）柳（桔梗、龜造）赤坂並木（彌次郎、清。喜多八、操。親爺、其柳。小僧、市菊。和尚、桔梗）絃（道之助）

十時過ぎ終演、淺間行きのバスは一行で滿員、どや〳〵と宿へ着いてざんぶとばかり男湯も女湯も大繁昌。これから夕食で二階の大廣間は一時頃迄大賑ひ、それ〴〵部屋へ寢に就いてひつそりした後で膳を椽側へ持ち出して新しく取寄せた

酒で都昇兄と僕の二人は遠山近溪の夜氣にひたつて三時頃まで閑談をした。

翌る日は疲れて部屋でのびてゐる人、或は遊戯に夢中の人、二階の廣間には桔梗、操、壽瓢、鳴門、呑笑、都昇氏等は二時頃まで義太夫雜談と逸話で花が咲く。僕は腰痛タで長くなつてゐると、呑笑氏が妙藥淺里の金丹豪を教へて、しかも貼り方に祕傳があると、腰の痛い處を上手にさぐつてべた〳〵貼りつける。夕方の樂屋入り頃には效能いちじるしく利いた。

（二日目）酒屋（松玉、龜造）戀十（其柳、道之助）安達（都昇、龜造）忠四（壽瓢、宗之助）忠六（がん昇、長八）宿屋（市菊、龜造）儀作奥（呑笑、道之助）先代（鳴門、猿之助）鮨屋（清、道之助）寺子屋（文久、道之助）壺坂（桔梗、猿之助）七段目（由良之助、清。力彌、市菊。三人侍、がん昇。貴柳、文久。おかる、操。平右衞門、桔梗）紘（道之助）

都昇、呑笑の兩氏は語り終つて十時の汽車で歸京。初日同樣十時過ぎ芽出度終演をして一同宿へ歸れば、此の夜は酒も豐富に足つて前夜に增さる大賑ひ、がん昇氏が長八さんに「お前は富取さんの傍にねるがいゝ」と言ふので、長八さんと僕は並んで盃を手にしたが、成程、長八女史の腕前を今夜初めて拜見した。こゝに都昇兄でもゐたら大變、夜を明かしてしまふ事は受合ひだ。

九日午前八時半發で僕は清、操、市菊、壽瓢氏等に道之助師外と長野行に乘込み清、操、壽瓢氏は篠の井から東京へ、僕等は善行寺參詣をして午後一時廿五分發の上野行きで歸京、篠の井へ着くと猿之助師と文久、桔梗、鳴門、がん昇、其柳、長八氏など寢遲れた連中が松本から立つてこゝでどや〳〵と乘込んで來た。

松本から長野への道中、姥捨山や川中島のあたりは三十年振りで、昔釜屋村の堇哉君を訪ねて川中島の面した座敷で句作した事を思ひ出してなつかしかつた。

旅中吟　清

○

汽車の窓山邊に見ゆる山櫻

○　都昇

きくからに井筒の湯とて風薰る

○　壽瓢

遊井筒湯

車入雲徑萬綠間　筒泉一浴世情疎
潤流援遶殘花山　雲鬟清樓擁客居
此行侶伴多騷客　塵事擲來還耐樂
盆地風光載粹還　簾前閑繙五行書

○　芳河士

諏訪湖

霞低ふ草よりたちぬ山の湖

井筒の湯

山梨の花こぼれ湯女何を干す
行春や湯槽溢るゝ湯の加減
晝永き大廣間皆が眠むた顏
山近く欄干に寄る朧かな

姥捨

山を背に耕す朝の村靜か

川中島

この川の春涸れのして石高き

會報と消息

▼綾秀會 五月廿一、二の兩日城北靜岡縣人會事務所にて開催。隣組員にて滿員を呈した。（廿一日）三代記（翠瓢）太十（治光）陣屋（司光）壺坂（壽光）長局（壽瓢）（廿二日）日吉（翠瓢）合邦（愛壽）宿屋（清壽）酒屋（綾登）中將姫（龍司）忠四（壽瓢）絃（綾秀、綾柳）

▼淨雲會 淨雲會は第十一回を五月廿三、廿四の兩日入谷倶樂部に開催。（廿三日）實盛物語（文盛、絃平）宿屋（晉水、和光）鳴門（都竹、都太夫）陣屋（巽、絃平）新口（都昇、都太夫）（廿四日）繼十（光玉、佳照）三代記前（中次）後（子太郎、和孝）赤垣（柳光、佳照）太十（其角、松四郎）鮨屋（義昌、和孝）なほ六月廿七日並木倶樂部に於て大會を開催。

▼十喜和會 十喜和會は五月廿八、廿九の兩夜相互倶樂部に開催。（廿八日）堀川（彌生、辰六）寺子屋（淡路、仙玉）夜叉王（素鳳、吉和）玉三（軌外、猿玉）柳（玉鳳、吉和）（廿九日）合邦（義昇、津賀昇）酒屋（あるを）長局（山生、鹿重）十種香（平茶、吉和）

▼鶴澤絃平連長野へ 鶴澤絃平連は長野市小林瓢氏主宰のひさご會後援にて六月七、八兩日長野へ遠征、同市西後町別院太子會館に於て大會を開催。（初日）御祝儀（長野連）合邦（春和）柳（菊水）彌作（吾鈴）沼津（榮樂）寺子屋（あるを）酒屋（ひばり）布三（文盛）松王（千年）鮨屋（隅斗）同奥（呑笑）辨慶（都）太十（巽）七段目（由良之助、あるを。重太郎、隅斗。彌五郎、呑笑。喜多八、都。おかる、ひばり。力彌、文盛。平右衛門、春和）（二日目）御祝儀（長野連）太十（ひばり）同奥（千年）八陣（都）陣屋（巽）紙治（あるを）帶屋（春和）儀作（呑笑）合邦（榮樂）十種香（菊水）宿屋（文盛）逆櫓（吾鈴）同奥（隅斗）野崎（久作、春和。お染、あるを。久松、文盛。母、都。下女、吾鈴。お光、ひばり）以上絃（絃平、絃內、春子）

▼三好會 三好會は毎月月水金の晴天に限り午後六時半より練習を開始、初秋豫て豫想中の岐阜縣へ遠征を企て往復日數十日、巡遊地藝題等は決定次第更に通信。（森三好報）

▼廣助連の團體優勝 昨秋第十回大日本素人淨瑠璃會にて團體優勝旗を獲得した豐澤廣助連は今春の第十一回にも再び優勝旗をかち得た。

▼大連旭勝會 大連旭勝會は五月の例會を十日午後七時より鈴木呉服店三階にて開催。壺坂（山城）玉三（うろこ）太十（榮枝）寺子屋（湖東）陣屋（白水）酒屋（あさひ）絃（旭勝）

▼撫順和樂會 撫順に於ける素義和樂會は五月十七、十八兩日商工公會樓上にて春季大會を開催。（初日）儀作（吾妻）宿屋（壽）合邦（久米）太十（鳴門）沼津（定樂）酒屋（都）阿古屋（長門）絃（猿子）ツレ（繁、ゆたか、小鶴、壽）胡弓（千枝子）琴（雅紫都）（二日目）寺子屋前（四條）同奥（梅枝）妙心寺（勝鳳）太十（千歲、文之助）陣屋（三乘）合邦（榮）阿漕（和樂）引窓（美松）千本道行（忠信、定樂。靜、壽。藤太、榮。家來、

勝鳳)絃(猿子)ツレ(ゆたか、繁、小鶴)皷(秀樂)

▼**女義若女會**　東橋亭にて第廿四回を五月十五日開催。鳴門(素八、駒登久)酒屋(綾清、駒清)岸姫(素廣、駒登久)鰻谷(素昇、猿玉)辨上(素次、駒清)　第廿六回は六月一日同所にて開催。組打(素次、駒千代)沼津(素八、駒登久)太十(小津賀、紋敎)柳(素廣、駒登久)十種香(重子、勝八)

▼**女子部後援會**　第十六回を五月廿八日午後三時より雷門並木倶樂部に開催。船別(千惠子・佳仙)八陣(佳世子、三勝)油屋(住若、清一)先代(駒龍、津賀昇)合邦前(三勝、駒登久)寺子屋(越駒、紋敎)鮨屋(團蝶、猿幸)宿屋(昇登、綱助)辨慶(團雀、清二)酒屋(清司、猿玉)合邦奥(彌周、三生)近八(重子、勝八)次回は六月廿八日。

▼**兜會役員改選**　兜會は五月二日通常總會の席上役員改選を行ひ、會長鈴木松寶氏、副會長寺岡三幸氏、幹事長荒木泉氏、會計北村三葵、藤田其晶氏に決定し前會長鈴木和樂氏、副會長近江清華氏は相談役に、幹事長本多可笑氏は顧問として推擧、五月廿日午後三時より上野「新湯河原」にて新舊役員顔合せ事務引續ぎを催ほした。

▼**鶴澤綱造會**　五月十九日夜並木倶樂部に開催。出演者子太郎、潮、隅斗、桔梗氏等にて聽手には素義の顔が多く見えた。

▼**三人會**　伊藤松鶴、的野關路、桑原美峰三氏にて組織の「三人會」は五月廿日相互倶樂部に開催。なほ同會の開催日は毎月廿日である。

▼**今治市行き**　細川清、高瀨操、吉田美地句、緒方千晴、松岡語松の五氏は、淨曲協會支部設立記念淨瑠璃會出演の爲め今治市に遠征。(十八日)陣屋(千晴、松十郎)揚屋(操、道之助)合邦(小仙)(十九日)鮨屋(清、道之助)鳴門(和生、道之助)太十(小仙)(廿日)合邦(語松、寛治郎)新口(紫光)先代(美地句、寛治郎)にて公會堂三千人に近き超滿員の盛況を呈した。

▼**水戸部いづみ氏**　一月より病氣にて二ケ月程入院、退院後久しく自宅にて靜養中であつたが、此頃元氣恢復ぼつ〳〵お稽古に親しめるやうになつた。

▼**森　市菊氏**　森市菊氏は京橋の有力者で常に區内の諸事に奔走盡瘁されてゐるが、五月十三日夕より京橋公會堂に於て貯蓄報國、勤勞慰安として催ほされた義太夫と新内の夕に出演。竹本福彌の絃で沼津を語つて好評を博した。此外義太夫では壺坂(福彌、勝八)義太夫振酒屋(立方昇之助、歌介。太夫、福彌。絃、勝八)があつた。

▼**豐竹駒若太夫師**　豐竹駒若太夫師は司太夫を襲名、文樂座五月興行にて千兩幟の猪名川で披露をした。

▼**竹本陸路太夫師**　竹本陸路太夫師は二代七五三太夫を襲名し、同六月興行に鶴澤綱造の絃で合邦を語つて披露した。

▼**豐竹呂太夫師**　佳照會主催「藝に遊ぶ會」の第一回に招かれ、廿六日上京、廿七日夜中川愛氷氏宅にて寺子屋全段を語つた。

▼**豐澤扇之助師**　山田義昇氏外連中の肝入りで豐澤廣助師の預り弟子となり、六月より文樂座出勤の爲め山田氏が同伴

して下阪。向ふ一ヶ年修業する事になつたが、修業の曉は團平の前名權平を襲名するとの事である。

▼松葉家音譜普及會 松葉家音譜普及會は今日までその發行五十餘種に達し、内地は勿論遠く海外にも頒布されてゐるが、今回七週年を記念に義太夫の節の名稱、並びに手順など、その内の主なるものを選びてレコードに吹込み詳しく説明する事になり、目下豫約募集中である。

▼無名會 六月八日並木倶樂部に開催。合邦(松鶴、猿幸)沼津(操、道之助)宿屋(美峰、猿之助)忠九(桔梗、綱助)

▼南北座 六月十五日より五日間築地國民新劇場に於て開演。番組は本號編輯まで未着。

▼嚴太夫追善座談會 岡田蝶花形氏主催にて豊竹嚴太夫の追善座談會が五月十三日午後四時より上野公園韻松亭で催ほされた。席上手向草御所(蝶花形、仙玉)樓門(子太郎、和孝)美濃屋(古清、松子)柳(三玉、龜造)寺子屋(竹史、清吉)の後一同追悼談あり、毎年その逝去の日四月廿三日を期して嚴太夫忌として淨曲研究座談會を催ほす事に申合せて散會。この日遺族夫人、娘六人を迎へ、出席者は寺岡三幸、松尾武市、山田壽瓢、平井軌外、内田富太郎、竹本都太夫、ジョンデー、金川文樂、竹本東朝、竹本佳照、竹本七五三花、豊澤仙玉、竹本伊達子等四十三名にて盛會。

▼鶴澤寛三郎師追善 鶴澤寛三郎師は十二月六日一週忌に相當するが、追善義太夫會は十月六日茅場町清水ビルに於て開催。

▼永井永樂氏追善會 今春東都五十義會に出演中高座にて發病永眠した永井永樂氏の追善義太夫會を竹本和光會主催。東都五十義會、竹本小和光會應援にて六月九日午前十一時より並木倶樂部に開催

當座帳

▽長谷川貫氏　滿洲新京特別市中央通り滿洲日々新聞文化部に轉勤。

▽伊藤松鶴氏　無名會へ入會。

▽小泉眞吉氏　宇都宮市直井病院の院長に榮轉、宇都宮市外峯一七四番地へ轉居。

▽野田高尾氏　店舗改築落成。

▽白井清華氏　五月廿三日秩父三十四ヶ所を參詣、廿七日歸京。

寄贈新刊

▼梨園▼みどり▼サンデウ▼淨曲新報▼大日本淨瑠璃界▼露▼白塔▼淨曲研究▼京城のラジオ▼藝▼寶塚月報▼藝術▼嚴太夫の一生▼文樂座人形淨瑠璃

訃報

金杉寅太郎氏 豊竹古靱太夫師息金杉寅太郎(通稱憲祐)氏は五月七日午後三時逝去、翌八日近親及直門弟のみにて密葬し、五月廿五日午後一時より二時迄自宅にて告別式を執行。

哀悼の意を表す。

太棹社

三都聯合義太夫大會

東京に九重會生れ大阪の八千代會と交互京阪にて合同大會を開催する事になり昨春は大阪方東京に出張、昨秋は東京方大阪に遠征し益々兩會の親睦をかため、今春は第三回大會として大阪方の東京出張の番である處、今回は京都素義界の重鎭澤田金聲、金田出雲、高田タツミ三氏の出演希望があり、茲に三都聯合大會となり六月五日より三日間正午より淺草並木倶樂部に於て華々しく開催したが、近來空前の盛況を極めた。番組左の通り

（初日）樓門（子太郎、和孝）太十（千鶴、猿平）城木屋（鶴峰、友春）本下（紅司、辰六）陣屋（信濃、稲丸）河庄（金聲、庄次郎）中入……吉田屋（平茶、吉和）沓掛（まつ尾、稲丸）志渡寺（出雲、友造）忠四（十八公、勝平）大文字屋（生樂、稲丸）安達（松鶴、猿之助）鳴門（利生、小住）大切阿古屋（阿古屋、操。重忠、桔梗。岩永、松鶴。榛澤、千鶴）絃（道之助）ツレ、琴、胡弓（絃内、紋三郎）

（二日目）陣屋（清雀、辰六）山姥（桔梗、綱助）鮓屋（まつ尾、稲丸）野崎（操、道之助）彌作（出雲、友造）新口（櫓、友造）中入……岸姫（千鶴、觀西翁）引窓（鶴峰、友春）三代記（タツミ、庄次郎）酒屋（香良花、三福）岡崎（信濃、稲丸）吃又（十八公、勝平）市若初陣（金聲、庄次郎）大切千兩幟（おとわ、平茶。稲川、桔梗。鐵ヶ嶽、千鶴。大阪屋、殿母、呼出し、大江）絃（猿平）

（三日目）油屋（古平、猿平）十種香（平茶、吉和）淡路町（鶴峰、友春）伊賀五（タツミ、庄次郎）喜内（清華、觀西翁）合邦（利生、小住）中入……楠三（紅司、辰六）志渡寺（紫幸、小住）新町（小若、稲丸）堀川（操、道之助）湊町（重司、小住）佐太村（桔梗、綱助）寺子屋（櫓、友造）大切忠七（由良之助、香良花。おかる、千鶴。重太郎、桔梗。彌五郎、紅司。喜多八、操。力彌、子太郎。平右衞門、松鶴）絃（猿之助）

浄曲翼賛會誕生

「本會の目的は淨曲を樂しむと共に之れにより日本精神の基礎たる忠孝仁義節の五行の途を明徵にし以て時局下に翼賛するを主眼とす」といふ目的の下に事務所を京橋區槇町三の五川口氏方に置いて「淨曲翼賛會」が生れた。會員は北島北斗、高橋十三三、岸竹史、緒方千晴、川口子太郎、水野昇、一松みどり、橋本三司、箕浦其甫、西村游史、保坂有曲、纈纈紫蝶、村上素水、平井軌外、谷口王華、德永靜翠の諸氏、第一回を五月廿九日午後三時より銀座「交詢社」に於て開催。

開會の辭（有曲）忠六（軌外、巴住）陣屋（昇、猿平）合邦（十三三、團蝶）同奥（竹史）酒屋（千晴、猿平）淡路町（王華、和孝）新町（子太郎、綱助）岡崎（北斗、猿幸）野崎（紫蝶、仙玉）沼津（三司、猿三郎）太十（光秀、素水。十次郎、千晴。初菊、軌外。さつき、

十三三。操、昇。久吉、竹史)絃(和孝)

靜淨會生る

靜岡縣出身並に同縣に緣故ある人々に依り「靜淨會」を組織し、五月十四日入谷倶樂部にて先づ小會を兼ねて協議會を開催したが、同會は京橋一丁目九時田弘太郎(靜史)氏方に事務所を置き、年四回大會を催ほす事に決定し、六月十二日並木倶樂部にてその第一回を開催する事になり役員も左の通り決定した。

會長(山田壽瓢氏)理事長(時田靜史氏)顧問(岸竹史氏、星野桔梗氏)理事は次回に定むる事。

なほ五月十四日の出演者は左の通り。

寺子屋(竹史)堀川(靜史)寺子屋(勝駒)梅由(蟻若)壺坂(淺路)太十(美昇)本下(壽瓢)忠九(桔梗)絃(佳照、越駒、綱助、綾秀、淸司、淸吉)

大日本素人淨瑠璃會成績

既報大日本素人淨瑠璃會は吾孫子櫓、笹村ふんど、伊東柳平、竹本大隅太夫、竹本文字太夫、豊澤團友、鶴澤叶の七氏審査のもとにその第十一回競演大會を四月廿五日より四日間大阪文樂座に於て開催、審査の結果左の通り。

利生(一八四、四)金聲(一八三、六)生樂(一八一、三)重司(一七八、七)和十(一七五、六)小若(一七四、〇)義鳥(一六八、九)タツミ(一六七、三)貫道(一六四、四)鶴笑(一六二、九)登一(一六一、七)鶴峰(一五八、六)榮四(一五五、〇)吉田うろこ(一五四、七)松鳳(一五四、六)三樂(一五三、九)紅司(一五三、四)小富士(一四九、九)里昇(一四七、三)あしべ(一四五、七)喜玉(一四五、四)光友(一四四、六)素呂璃(一四四、六)きく水(一四二、六)幸遊(一四一、九)まつ尾(一四一、〇)登鶴(一三九、三)五勢(一三八、〇)一蝶(一三七、六)やまと(一三七、一)住之助(一三七、〇)十九集(一三六、〇)萬華(一三五、八)美鳳(一三五、六)紫扇(一三五、一)得谷(一三四、九)長登(一三三、七)榮糸(一三三、六)淡路(一三三、四)藤政(一三三、一)大和(一三二、四)アリオ(一三一、七)千司(一三一、一)大彌(一三一、〇)晴山(一三〇、七)松呂(一三〇、五)三升(一三〇、五)長生(一三〇、四)白水(一三〇、〇)東升(一二九、七)ナゴン(一二九、四)鳴戸(一二九、〇)達竹(一二八、三)やなぎ(一二八、〇)貫昇(一二七、二)吳山(一二七、二)翠松(一二六、六)璃松(一二六、四)華峰(一二五、九)金華(一二五、七)吟青(一二五、〇)盛之(一二五、〇)和鳳(一二四、三)小花佳(一二四、二)貴雀(一二三、七)昇(一二二、六)山玉(一二二、〇)二見(一二一、六)鐵洲(一二一、三)雅樂(一二一、三)敷島(一二〇、四)透昇(一二〇、〇)花雀(一一八、四)常盤(一一八、一)米友(一一七、三)小里昇(一一七、三)河桝(一一七、三)千歳(一一七、三)花月(一一六、八)はじめ(一一六、七)榮鳳(一一六、六)古城(一一六、六)秀雀(一一六、三)義昌(一一六、三)都廣(一一五、七)左文字(一一三、六)暫(一一三、一)松六(一一二、九)喜昇(一一二、七)豊

（一一二、三）古蝶（一一一、六）印部鳴戸（一一一、四）東和（一一一、一）都華（一一〇、一）まる一（一〇九、四）歌昇（一〇八、七）紫保（一〇八、三）無節（一〇七、三）昭十（一〇六、九）臥笑（一〇六、一）春洋（一〇五、九）一港（一〇三、七）巖（一〇三、〇）呂角（一〇〇、九）花昇（一〇〇、七）萬兩（一〇〇、三）むつみ（九八、一）一瓢（九八、一）貫昇（九六、七）日石（九六、三）白鳳（九五、四）鬼外（九五、一）都號（九三、六）

無審査（快蝶、うろこ）

東大關（利生）關脇（生樂）小結（和十）

西大關（金聲）關脇（重司）小結（小若）

進歩優賞（一等翠松）（二等古城）（三等春洋）

優賞（松六、透昇、長登）

團體優賞（豊澤廣助連）

竹本土佐廣改名披露

本誌前々號の消息欄に報道した通り、斯界に再出馬の竹本伊達子がその師竹本土佐太夫から土佐廣の藝名を貰ひ、改名披露には土佐太夫も上京して口上を延べる事になつてゐた處、先頃土佐太夫の急逝で本人伊達子の悲しみは極に達し、一層改名披露は中止して恩師の追善會にしたいとまで發心したのであるが、土佐廣改名は亡師の遺志であれば此際進んで改名をする事は報恩であり又追善でもあると各方面の勸告に本人も漸くその氣になり、六月三日正午より日本橋倶樂部に於てその改名披露會を催ほした。素義の應援出演十數番の後竹本米太夫の口上に土佐廣は頻りに感激の涙を拭つてゐたが、生前土佐太夫から今日の改名披露の爲めに贈られた見臺も形見となり、長局を一段緊張のうちに力演をしたが、まこと師匠がのり移つたかと思はるゝ出來榮えで大好評を博した。なほ土佐太夫とは別懇の間柄であつた齋藤拳三氏の挨拶もあつて大切は桔梗、松鶴、三芳、關路氏（絃猿之助）の阿古屋の掛合で芽出度終演をした。

因に相三味線の鶴澤綱助とは在阪當時の相三味線で共に修業をした仲であつたが、今回二十年振りで復活したものである。

佳照會の臨時大會

今春日本橋倶樂部に於て二日間春季大會を催ほし、大阪より桐竹門造指導の乙女文樂を招聘して頗る好評を博した佳照會は今回臨時大會として又々乙女文樂を招き、六月十六日正午より九段軍人會館にて左記番組に依り賑々しく開演する事になつた。

車引（駒龍、三勝、佳仙、佳世子）絃（仙照）河庄前（越道、巴住）奥（小津賀、紋教）安達前（佳若、清一）奥（彌周、三生）白石前（團蝶、猿幸）奥（染登、猿幸）鮨屋前（越駒、紋教）奥（重子、勝八）中將姫（佳照、清一）

井上泉氏追善義太夫會

前號報道の如く井上泉氏後援義太夫會が企劃されてゐた處、開催間際に泉氏は遂に此の世を去つてしまつたので會は告別式と變り、百七十餘名の世話人兼後援のもとに春和、都昇、叶、乃菊、文久、光樂、國聲、あるを、山生、桔梗、銀水、清華(白井)の諸氏が委員となり、なほ日本義太夫因會の男女兩部の後援にて五月廿七日正午より並木倶樂部に於て告別を兼ねての追善義太夫會が催ほされた。

井上泉氏は伊豫宇和島に生れ、十歳位より義太夫を語り出し、上京したのは二十二歳の時で六十年も斯界にひたつてゐたといふ强者、又人形にも若い時から巧者であつた。昨年五月修善寺へ行き歸京後腸加答兒にて六月より床に就き一時小康を得たが又々病んで一月程前から全く再起覺束なくなり、二度目の腦溢血にて遂に五月廿三日午后四時不歸の客となつたのである。享年六十九、戒名は淨泉院喜城居士。

大阪文樂座六月興行

紋下竹本津太夫逝いて淋しき中にも竹本陸路太夫の七五三太夫襲名披露があり、併せて竹本叶太夫、竹本角太夫の入座出勤にて六月一日初日開演した。

忠臣蔵=本蔵下邸より道行迄。本蔵下邸。中(さの太夫、新太郎。常子太夫、友三郎。津磨太夫、清友。宮太夫、一郎右衞門)前(文字太夫、新左衞門)後(呂太夫、仙糸)琴(仙三郎、綱延)道行(戸無瀬、角太夫、叶太夫。小浪、南部太夫、伊達太夫)ツレ(長尾太夫、三瀧太夫)(隅若太夫、叶美太夫、越名太夫)(松島太夫、呂賀太夫、織子太夫)(伊勢太夫、千駒太夫)(廣助、寛治郎)(重造、友衞門)(叶太郎、友作、團伊左)吉蔵、團作、德若)(仙松、勝之助、扇之助)(重造、友衞門)

一谷嫩軍記=熊谷物語(大隅太夫、清二郎)首實驗(相生太夫、吉五郎。織太夫、團六)

基太平記白石噺=吉原揚屋=(古靱太夫、清六)

小鍛冶(新曲)=老翁實は稲荷明神(相生太夫、織太夫)宗近(伊達太夫、南部太夫)勅使(和泉太夫、源太夫)(雛太夫、濱太夫)(泉和太夫、源太夫)道八(吉五郎、勝平)(吉左、團六)(清芳、喜代之助、八造)

攝州合邦辻=合邦住家。切(叶太夫、寛治郎)(角太夫、廣助)後(陸路太夫改め七五三太夫、綱造)

人形配役

熊谷、宗六、老翁(榮三)戸無瀬、宮城野、玉手(文五郎)本蔵(門造)伴左衞門(玉市)三千歳姫(榮三郎)角内(兵次)小姓(門次)軍次(文枝)藤の局(小兵吉)彌陀六、入平(玉幸)義經、淺香姫(光之助)景時(玉德)宮里(紋司)宮柴(文二郎)おのぶ、俊德丸(文作)お政(多三郎)禿(紋之助)宗近、合邦(玉藏)勅使(政龜)合邦女房(紋太郎)若狹之助、小浪、相模(紋十郎)

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀨いろは氏　木村一司氏　鈴木一信氏　高瀨一昇氏　宮原以興子氏　吉川浪補氏　櫻井呂光氏　阿部一氏　橋本月光氏　菅原葉梅氏　田中笑氏　村白猿氏　島北斗氏　北佐藤平之助氏　澤巴氏　中安藤どくろ氏　田登盛氏　吉川都山氏　小川都竹氏　安藤昇氏　安藤東光氏　國友

高橋東好氏　保々長平氏　緒方千晴氏　栗原千鶴氏　久米中次氏　岸竹史氏　松本千鳥氏　神馬里芳氏　岡本柳光氏　林林昇氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　林和勢氏　青山和狂氏　飛石かなめ氏　加藤兜氏　高橋可遊氏　西田可松氏　黑川叶氏　高山和子氏

米澤雅樂氏　岩崎がん昇氏　大用大嘉津氏　小森叶昇氏　田口辰壽氏　井上巽氏　小林太二八氏　根本團壽氏　野田高尾氏　杉山橘氏　坂倉素遊氏　井上素鳳氏　新川月美氏　川口子太郎氏　小埜長とろ氏　宮本武藏氏　萩原うぼ氏　乃村菊氏　中野羽氏　石川笑氏　本城生之氏　山下冠華氏　國井彌やまと氏　岡田彌聲氏　福又絲氏　福岡笑氏　松中氏　長林文久氏　谷川

川田二三樂氏　上杉文盛氏　鈴木兒雀氏　安藤光樂氏　水戸部いづみ氏　原田越巴氏　河野國聲氏　松岡語松氏　田中湖月氏　湯淺光玉氏　保谷向紅司氏　山崎陽氏　中田五口氏　岡崎円六氏　寶藏寺天昇氏　堂野前鐵幹氏　大築葵氏　及川旭氏　柳川有明氏　中藤淡氷氏　藤牧淺路氏　影山三玉氏　奥村三幸氏　寺岡さえ氏　木村さか生氏　齋藤山

平井榮司氏　橋本三壽氏　藤田清氏　細川三氏　金田鳳氏　錦田金氏　淺田錦奇氏　櫻松氏　星野聲氏　日野梗氏　金泉氏　前島岡昇氏　貴氏　岡木世氏　歸山歸花氏　平井外氏　軌月氏　橋本掬氏　乾桔氏　增田梗氏　增田城氏　喜氏　三浦鏡氏　田喜香氏　澤部鳳氏　岩木其氏　義角氏　吉良雀氏　蟻氏　山田若氏　義氏　三並昇氏　義氏　吉坂昌氏　保坂玉氏　岩田有曲氏　末成氏

高瀨操氏　吉田句氏　美地氏　横井三氏　由氏　野口と氏　みな氏　北村葵氏　三氏　池田國氏　三氏　吉田芳氏　三氏　高橋宮氏　古氏　村上豆氏　美津氏　須田義氏　美氏　鈴木松寶氏　小原松樂氏　勝田松雨氏　伊藤松鶴氏　菊池秋月氏　花房紫蝶氏　平井壽樂氏　山田壽瓢氏　田口司氏　倉田司重氏　濱口秋水氏　打矢晉氏　西內昭平氏　武笠宏亮氏

高品一重氏　平山平茶氏　桑原美峰氏　池田美尙氏　魚崎美福氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　塚口清雀氏　佐藤清司氏　富岡生昇氏　沼井盛鶴氏　時田靜史氏　關口靜香氏　仁木翠松氏

（地方之部）

米國　杉山陶岳氏
同　兼廣廣玉氏
同　西本西紫氏
大阪　氏家鶴峰氏
神戸　岡田源氏
大垣　吉岡十八公氏

船橋　川奈部銀司氏
下關　保良鈴鳳氏
横濱　和田和朝氏
同　霜島錦司氏
同　鈴木香雀氏
松戸　木下松玉氏
同　田中呑笑氏
平塚市　國森鳴門氏
八幡　古賀大彌氏
安東市　岩崎山彥氏

新名譽會員

井上素鳳氏
岩崎がん昇氏

右の諸氏名譽會員御快諾を賜り難有奉深謝候

太棹社

編輯後記

★今月は竹本津太夫追悼號として發行致しました。各方面の皆様から故人の思ひ出話、其他澤山の御寄稿を頂きましたのは有難いことで、又近江氏より多大の御盡力を賜りました事を深謝致します。

★追悼號編輯につき、因會々長豊澤猿之助師の話も伺ひたいと一日記者は同師を訪問致しましたが、取次のおばさんは稽古中とて取次いでくれなかつたのは遺憾の事でありました。

★鏡太夫を筆頭に駒太夫、土佐太夫、津太夫と急に五巨頭を失つた文樂座は未曾有の厄年でありました。此外にまだもう一人辰太夫師が亡くなつてゐます。

★見舞に行つて「私がわかりますか」と津太夫師の手を握つた古靱太夫師に「息子を賴む」と言はんとして既に言ひ得なかつたといふ事ですが、無論「紋下を賴む」といふ事も言ひたかつたのであらうと察しられます。濱太夫師は「古靱師に紋下を繼いで貰つて下さい」と松竹の白井社長に賴んだといふ事を聞きましたが我が子を亡くした古靱太夫師は亦此の濱太夫を自分の子のやうに愛してゐるさうで、いろ〳〵風評のあつた紋下問題もこれで凡て解消したわけで、津太夫師も喜んで冥目された事でありませう。

★齋藤金太郎氏は井上泉君追善會のお世話で永々多忙を極められ、今月は「義太夫と新體制」を一回休筆せられました。

★今月も記事輻輳の爲め頁の都合もありましたので、本號に掲載すべき筈の三五郎氏の「邦樂年表に就て」を又々次號にまはすの止むを得なくなりました事は何んとも恐縮に堪えません。此外紅雨莊主人氏から「新文樂の黎明」といふ玉稿を頂いてをりますが、七月は文樂座の東上を幸ひこれも七月號に掲載する事に致しました。なほ内田三千三氏の「女義隨評」も次號に、それから齋藤拳三氏は「土佐太夫の思ひ出」を書く事になつてゐます。

★「淨界と消息」を「會報と消息」に變更致しました、同じやうなものですが毎月御通信のあります催ほしを本欄に記載して彙報としては大會又は新生の會を報道する事に致しました。

芳河士

第百廿六號　（毎月一回十日發行）

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割增

昭和十六年六月七日印刷納本
昭和十六年六月十日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稻田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稻田町五八
印刷所　栗原印刷所　電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社　振替東京三一七八五番

定價		廣告料	
一部	金三十錢 郵稅五厘	普通	一頁 金貳拾圓
六月分	金一圓八十錢 郵稅共	特別	一頁 金參拾圓
一年分	金三圓 郵稅共		

社告

讀者倍加の件

昨年紀元二千六百年を記念に讀者倍加運動を起し、皆様に御盡力を仰ぎました處、多大なる御援助に依りまして名譽會員並に新讀者が陸續增加致しました事は、弊誌が斯界に於ける唯一の機關雜誌として益々發展するに力强く感謝に堪へぬ次第であります。お一人が一人の新讀者を御紹介賜りますれば千人が忽ち二千人になります譯けで、此際何卒御援助の程を偏に御願ひ申上ます。

廣告料の件

弊誌は發行以來料金に比較しては割合に廣告の枠を大ザツパに大きくしてゐました處、今日の時勢にこれではいかぬから改めたらよからうと皆様のおすゝめもありますので、三月以降枠を改める事に致します。從來の料金に對して一頁は一頁でありますが、つまり半頁であつたものが一頁の三分の一、四半頁を八半頁といふ具合にしたいと思ひます、何卒御諒承を願上ます。

誌代御拂込みの件

誌代前金切の際には御送金の御手數を省く爲め、從來案内狀を添へて集金郵便を以て頂戴に罷出ました處、今度郵便規則變更と共に集金郵便取扱ひが一時中止となりましたので、「拂込料金加入者負擔」の申請を致しましたから、今後前金切の皆様へは此の振替用紙を案内狀に添へて差出す事に致しました。其節は御手數恐入りますが何卒御拂込みを御願ひ申上ます。

太棹社

謝告

初夏の候皆々様愈々御清適の段奉賀上候陳者過般『香伯喜音』試聽會開催の際は御繁忙中賑々しく御來聽を忝ふし御蔭を以て好評を得申し候事は偏に御懇情の賜と難有御禮申上候就ては其後陸續御所望に接し今回増版仕り新荷到着致居り候間何卒御申込被下候はゞ欣幸の至りに奉存候

太十（全段）竹本南部太夫・鶴澤觀西翁

沼津（全段）鶴澤觀西翁・鶴澤寛治郎

右裏表十二枚づゝ折疊み文庫入體裁優美・定價一組金參拾圓

赤坂區田町一丁目十一　梅本方

香伯會

電話赤坂四五八八番

昭和十六年六月七日印刷納本
昭和十六年六月十日發行（毎月一回十日發行）昭和十六年三月廿八日第三種郵便物認可
太棹（第百廿六號）
定價金參拾錢